

久堅の 雲井にみえし いこま山

春は霞の ふもとをりけり

(以上十九首新勅撰和歌集)

江上望春霞

藤原爲氏

人とはゞ 見ずとやいはん 玉津島

かすむ入江の 春の曙

題しらず

藤原爲家

あたになど さきはじめけん いにしへの

春さへつらき 山櫻かな

順徳院

花鳥の ほかにも春の 有りがほに

かすみてかゝる 山のはの月

題しらず

藤原知家

難波なる みつともいはじ 蘆の根の

みじかき夜半の いさよひの月

建保四年百首歌に

藤原雅經

夏ふかき 澤へにまげる かりこもの

思ひみだれて ゆく螢かな

初秋の心を

後鳥羽院

このねぬる 朝けの風の をとめ子が

袖ふる山に 秋やきぬらん

河月似氷

嘉陽門院越前

月影は 氷とみえて よしの河

岩こす浪に 秋風がふく

正治百首歌に

後京極攝政前太政大臣

辛崎や にほてる沖に 雲消えて

風前擣衣

後鳥羽院下野

月の氷に 秋風が吹く

吹きぬろす ひら山かせや さむからん

まのゝ浦人 衣うつなり

題しらず

俊成の女

見し人も なきが敷りふ 露のよに

あらししかばの 秋の夕暮

旅の心を

後京極攝政前太政大臣

まだ志らぬ 山より山に うつりきぬ

跡なき雲の 跡を尋ねて

(以上十一首續後撰和歌集)

建長六年三首歌合に梅を

藤原爲氏

さきなばと またれし梅の 花のかに

こぬ人たのも 春の山里

岸歎冬を

藤原爲家

はやせ河 なみのかけこす いはぎしに

暮春を

こぼれてさける 山吹の花

藤原忠定

ながめこし 山のすう野の 夕霞

うの色となく をしき春かな

郭公を

藤原信實

朝戸あけに 立ち出でゝきけば 郭公

山のはみゆる かたに鳴くなり

題しらず

藤原基

あなし吹く ゆづきがだけに 雲きえて

ひはらのうへに 月わたるみゆ

光俊朝臣人々に百首歌よませ侍りけるに

藤原知家

更けゆけば 天つ空なる 雲もなし

心ながくぞ 月は見るべき

題しらず

平泰時

降る雪の はれ行く跡の 波のうへに

きえのこれるや あまの釣舟

旅の道にてよめる 同心人

近づけば のちのさゝ原 あらはれて

また末かすむ 二むらの山

大峯にてよみ侍りける 前大僧正道慶

雲かゝる 岩のかけ道 ふみくても

あやふき物は この身なりけり

名所歌よみ侍りけるに 後鳥羽院下野

あふ人に とへどかはらぬ ねなじ名の

幾日になりぬ むさしのゝ原

前内大臣の家の百首歌合に 藤原忠定

つくくくと ながむるまゝに 戀しきは

題しらず

藤原爲家

かすめるかたや むかしなるらん

たえずとふ かけひの水の なさけころ

音づれながら さびしかりけれ

十首歌の中に 藤原基

八雲たつ 道はふかきを あさか山

あさくも人の ねもひなるかな

(以上十三首續古今和歌集)

庭上落花 藤原經平

とふ人の またれし物を 庭の面に

あそをしむまで ちる櫻かな

待郭公 藤原通基

たづねきて けふも山路に 暮れにけり

心づくしの ほととぎすかな

初秋の心をよみ侍りける

藤原光俊

ながめつゝ 又いかさまに なげとて

夕の空に 秋のきぬらん

冬の歌の中に

荒木田延季

袖ぬらす 物とはきけど 槇のやに

過ぐるはをしき 初時雨かな

戀の歌の中に

源兼泰

うしと見し 人よりも猶 つれなきは

忘らるゝ身の 命なりけり

父身まかりて後よめる

平親清女妹

今日までも ながらふべしと 思ひきや

別れしまゝの 心なりせば

松間花

式乾門院御匣

(以上六首續拾遺和歌集)

見わたせば 松のたねまに かすみけり

遠里小野の 花の白雲

暮春曉月

藤原爲世

つれなくて 残るならひを 暮れて行く

春にをしへよ 有明の月

七夕

藤原爲相

かへるさの 袖ぬらすらん かさゝぎの

より羽にかゝる 天の川波

秋の歌の中に

法印定爲

あまのすむ 磯への苦屋 たえぐゝに

霧吹きのことす 秋の浦風

月の歌の中に

源兼氏

出でぬれど ひかりは猶ぞ またれける

まだ暮れはてぬ 山のはの月

海邊月

わたの原 山のはまらで 行く月は

雅成親王

明くる空こり かぎりなりけれ

題しらす

大江宗秀

梢をば まばらになして 冬がれの

霜のくちばに 嵐ふくなり

題しらす

丹波長有

つたへおく この葉にこり 残りけれ

れやのいさめし 道芝の露

題しらす

式乾門院御匣

大かたの 世をもうらみじ 心だに

うき身になふ ならひなりせば

嘉禎元年大嘗會悠紀神樂歌石戸山

藤原家光

神代より 祈るまことの 志るしには

岩戸の山の 例をぞとる

(以上十首新後撰和歌集)

鶯を

藤原季經

なほざりに 一もらうえし 吳竹を

ねぐらにしめて 鶯がなく

藤原實泰

雨うさぐ りのゝ吳竹 枝たれて

夕べのどかに うぐひすがなく

庭の春雨といふことを

九條左大臣女

つくぐと 春日のどけき にはたづみ

雨の數みる 暮がさびしき

春歌の中に

藤原爲兼

思ひりめき 四つの時には 花の春

水邊螢

はるのうちにも 明ぼのゝ空

藤原爲理

山陰や くらき岩間の 忘水

たねく見わた とぶほたるかな

風後草花

永福門院

志をりつる 風はまがきに 志づまりて

小萩がうへに 雨うゝぐなり

秋歌の中に

藤原光俊

雁なきて 山風さむし 秋の田の

かりほの庵の むらさめの空

夕暮に鶯のどぶをみて

藤原雅有

つらゝぬる 荻田の面の 夕暮に

山もと遠く 鶯わたるみゆ

河氷

九條左大臣女

たごひとへ うへはこほれる 川の面に

ぬれぬ木の葉が 風にながるゝ

冬の御歌の中に

永福門院

月影は 森のこずゑに かたぶきて

うす雪しろし 有明の庭

旅歌とて

藤原景綱

都にて またれし嶺を こえきても

猶山よりぞ 月は出でける

曉鐘聲

藤原家雅

ゆけど猶 まだ寺みねぬ 松原の

ねくよりひびく 入相のこゑ

山家を

藤原爲相

いほちかき 爪木の道や 暮れぬらん

軒端にくだる 山人のこゑ

家に百首歌よみ侍りける時 藤原爲家

山ぎはの 田中の森に 志めはへて

けふ里人は 神まつるなり

(以上十四首玉葉和歌集)

藤原爲實

百首歌奉りし時

大原や をしほの櫻 咲きぬらし

神代の松に かゝるしら雲

藤原宗秀

霧をよめる

かり衣 すう野の霧は 晴れにけり

尾花が袖に 露を殘して

伏見の院位におまじくける時。月十五首

藤原爲世

歌めされし中に

暮るゝまの 空に光は うつろひて

まだ嶺こねぬ 秋のよの月

題しらず

永福門院

暮れはつる あらしの底に こたふなり

宿とふ山の いりあひの鐘

題しらず

祝部行氏

折らずとも 人に語らん 山櫻

見る面かげを 家づとにして

羈中五月雨を

藤原秀茂

ぬれつゝも いくかきぬらん 旅衣

かさなる山の 五月雨の空

(以上六首續千載和歌集)

藤原爲藤

春雪

吹きまよふ 磯山あらし 春さにて

ねきつ沙あひに 淡雪がふる

藤原爲世

おなじ心を

春きても まだもぬ出でぬ 冬草の

ねなじ枯葉に 淡雪がふる

文保百首歌たてまつりし時 同人

せめてまた をしむ心を つくせとや

花より後に 春のゆくらん

連夜擣衣を

源具行

里人の ねぬ夜の數も 志ら露の

霜となるまで うつ衣かな

題志らす

平氏村

夕されば 身にしむ野への 秋風に

ひとりや草の 枕むすばん

山家郭公を

菅原在良

都人 まつらん物を 山里に

聞きふるしつる ほとくぎすかな

(以上六首續後拾遺和歌集)

第七期 足利時代

第四十九章 概説

第七期の區域——暗黒時代——暗黒中の光明——戰國時代の餘弊——
秘事傳授

南北朝の争亂時代より。足利氏の天下を経て。織田豊臣二氏の頃に至りて終る。これを第七期とす。或る人は之を名づけて文學界の暗黒時代といひ。或る人は寧ろ光明を暗黒中より見出だし得る時代なりといへり。

あはれ其暗黒とは何ぞ。世の上流に立つもの。文學に従事する暇なく。暇あるものも不規律無氣力なる歌文を作り。自家一流の學問を事として。概言すれば。不文者が社會の多數を占め。無學者が輿論を作り出だす時代をいふなり。

讀者は前に承久の變起り。後に元弘の亂來りしを知るならん。上を窺ふ逆徒

第七期の區域

暗黒時代

は日に月に横行して。朝廷あれども無きが如く。天下麻の如く亂れに亂れて。人々安き心もなし。此時にあたり忠臣は國の爲めに死し。義士は君のため死す。豈又専門文學者たる暇あらんや。

然れども幸にして時なほ新古今の盛時に近く。代いまだ盛衰記平家物語の作者と遠ざからざるが故に。うの熱にはかに去らずして。親房兼好頼阿等の數人を。劍の光りと弓弦の聲の間に見出だしたるは。天いまだ斯道を亡ぼさざりしなり。况んや此暗黒の原因たりし戰亂ころ。却つて好材料を興へつと。第二の盛衰記たる太平記を産出せしめし結果あるをや。

南北一致して足利氏將軍となり。天下は一先定まりたる如しといへども。上には王室の式微ますく加はり。下には内亂絶えずして。嘉吉應仁の戰爭あり。遂に英雄互に割據して。中原に鹿を逐はんとする世の中となりはてぬ。今や紫式部の筆の光を反射せし名所舊蹟は。草むす屍の下に埋もれ。定家家隆の歌の調べを反響せし佳境靈地は。矢叫びの聲もて満たされたり。あはれ南北朝には聞き得たりし先期文學の餘韻も。縷々絶えざること糸筋の如く。

折らば落ちぬべき萩の上の露にも比しつべき様なり。いかに危からずや。文學の命脈かくの如く累卵の危きにありといへども。室町東山の驕奢も之を興す能はず。信玄謙信の智も之を興す能はず。信長秀吉の勇も之を興す能はず。却つて之を僧徒の手に一任して。毫も惜しまざりしは。抑も又亂世を處するの忙がはしき。そこまでに手の届く暇あらざりしが爲めのみ。

然れども是は統計上の論のみ。結果上の論のみ。この暗黒時代。決して成す事なくして終りしものにはあらざりき。統計上とは何ぞ。作者大家の數の少なきに就きてのみ。論ずるをいふなり。結果上とは何ぞ。右の如く當期に好結果を見ざりしに就きてのみ。論ずるをいふなり。

暗黒中の光明

見よ秋毎に嵐ありて咲き揃ひたる草花を吹き荒らすを。爲めに埋もれ居たりし下草の顔をあぐる喜びもあるべし。戰爭は人間の嵐ならずや。文學の花を吹き荒らす。固よりすべなし。されども之が爲め舊習を一洗して。用語を自由にし。思想を自由にし。文章を自由にし。歌詠を自由にし。此不規律不文法の内に。未來遠大の光明を認め得せしめたるは。前後その比類を見ず。世

の文學者たるもの。單に中古に拘はるを知つて。近古に眼を轉ぜざるが多きは。蓋し一方に偏せるなり。片道に迷へるなり。果して然らば當期の文學。あに徒に暗黒の二文字もて。輕々しく抹殺し終らしむべけんや。况んや室町東山時代の如き。能樂に。茶道に。庭園に。繪畫に。蒔繪に。あらゆる美術の隆盛時代として推さるゝの時にあへるをや。

戰國時代の餘弊

秘事傳授

然れども昨日の味方は今日の敵といふが。戰國時代の風なれば。その弊は猜忌の人情となり。及ぼしては武道に文道に藝術に。すべて然らぬは無きに至れり。是れが即ち秘事傳授などいふものゝ起原にはありける。和歌の用語にさへ傳授ありて。「ほのく」と「かな」などの言葉は。師家の免許を受けずしては用ひられずとし。歌書物語の註釋にさへ秘事ありて。古今集にては。百千鳥。呼子鳥。稻あふせ鳥を三鳥といひ。源氏物語にては。揚名介。みつが一つ。そのおものゝ袋。を三箇の秘傳といひ。師家より教へられずしては私に解すべからざる難事なりとするが如き。文學は師家の私事と爲り終らんとす。一方には彼自由自在なる發達を爲すべき機會を與へながら。一方

には習學者を擧りて文盲無氣力のものたらしめんとする。最も嫌ふべく最も厭ふべき弊風を蒔きつゝあり。哀しむべきの至りずかし。聞く近年薨去ありたる近衛忠熙公。二十代の齡にて江戸に下られしに。尾州家の戸山の下屋敷にて饗應ありしに。その席上にて。

あづまなるものと思ひし 富士の嶺を

みやこのかたに 今日は見にけり

とよまれたるが面白きとて。其頃世上に言ひはやしけるが。或人は公に向ひ。何とて今日は見るかなとよませ給はざりけるかと問ひしに。さればとよ。さこりよまゝほしかりしかど。二條家より「かな」の傳授を未だ受けねば用ふる能はずと。答へられし事ありとぞ。是は幕末の事なれど。以て其弊風の及ぶところを見るべきなり。

さはいへ彼法式に限ある茶道能樂の如きは。秘事傳授を説くが必要あるひはあるべし。この文學上の自由を抑制し。狭く究屈なるものたらしめて止まんとするに至りしは。抑も何の理りぞや。

第五十章 言文の親睦

言語思想の自由——言文一致體——職人盡歌合の畫詞——能の狂言の詞

顧みれば遠くの古は。言文もとより二途ならざりき。漢學渡り來りてより。やう／＼に其分岐點を生じ。遂に相隔離するに至りしを。中古の文學は美を極め雅を極め。たゞ一向の貴族的に進みしが故に。又民間多數の協賛を得る事などは。ほとんど省みる暇なき有様なりしぞかし。

然れども文學あに社會一方の私有物ならんや。保元平治以來の戰亂と共に。舊習は打破せられて。既にもいへる言語思想の自由は來り。上下社會の俗語大いに翼を擴げて。美文の上になさへ和歌の上になさへ。侵入しつゝある結果として。謂はゆる言文一致體ともいふべき文章を見るに至りぬ。文もと言と分離すべきにあらず。此一事を以ても。暗黒時代の人知れぬ賜物が。文學世界に遺されつる一斑を思ふべきなり。見よ彼職人盡歌合の畫詞に。

言語思想の自由

言文一致體

職人盡歌合の畫詞

播磨鍋河島鍋もさぶらふぞ。ほしがる人あらば仰せられよ。弦をも掛けてさう。(鍋賣)

赤がはらけは召すまじきか。蹄り足にて安く候ふぞ。(土器つくり)

上戸たち御覽じて。涎ながし給ふな。(麴賣)

白布めせのう。はたばりも尺もよく候ふは。(白布賣)

とあるを。

又見よ能の狂言の詞に。

能の狂言の詞

僧「罷出でたるは。西近江から東近江まで。小用あつて参りまする愚僧でござる。左様に御座れば。日よりのからかさをかたげたは。不思議に思召さう。出家にからかさは似合うた物さうに御座る。まづそろ／＼参らう。

悪坊のう／＼御坊。どれからどれへゆかします。

僧「いや私が事で御座るか。

悪坊「なか／＼。

僧「いや西近江から東近江へ参ります。

悪坊「うれがしも参るほどに同道申さう。

僧「いやれまへを見ますれば。御侍さうに御座る。身どもは坊主の義で御座れば似合ぬ連で御座る程に。まづうれがしは先へ参りませう。

悪坊「しかとして道連になるまいといふ事でねぢやるか。

僧「いや左様では御座りませぬ。似合はぬやうに御座るによりかやうに申す。

悪坊「いや〜其儀でおぢやるならば。出家侍というて。いかにも親しうせいで叶はぬ物でおぢやる程に。どうぢやあらうとまゝよ同道申さう。

僧「其義で御座りませうならば先へ参りませい。

悪坊「いや〜出家を供に連れるといふ事はない。うなた先へおぢやれ。僧「は。みれなら参りまする御座りませい。

悪坊「のう〜御坊。さる御方で酒を飲うだが。おれは酔はぬと思へどもあるかれぬ程に。手を引いておくりやれ。

僧「いやはや手は引ませうが。其長刀がいかうあぶなう御座りまする。悪坊「ふん。杖についたがあぶなうおぢやるか。持ちやうがおぢやる。かうでは何とおぢやる。

僧「は。いやはやうれでは氣遣も御座りませぬ。

悪坊「御坊。かいこうだ長刀の出やうは早からうか遅からうか。

僧「何と御座りませうぞ。

悪坊「手を離しやれ。一手つかうて見せう。

僧「はいや。おかしやれませう。

悪坊「はて。はなしやれてや。(悪坊)

などあるを。

職人畫歌合の畫詞は。單に當時の物商なふ人々の言葉を寫したるもの。狂言は初より文として人に讀ませんと。の作にもあらず。況んや口うつしに傳へ傳へし間には。最初作者の語氣も多少かはり來りしなるべけれど。是等の文句の内に交じりて見ゆる文語を以ても。うの互に親密になりたるさまは。味は

るゝこと十分ならん。「物なおしやつう」といひ、さてもく「苦々しい事かななどいへる狂言の言葉は。言中に文の交じれるものにして。御狩にいざや出でうよ」といひ。「打ち連れ隠れ行かうよなどいへる謠曲の言葉は。文中に言の交じれるものなり。

然れども此いはゆる言文一致體なるものが。當期の普通文となりたるにはあらず。文は文にして。徒然草の如き。太平記の如き。前期に譲らざる名作ありといへども。子細に眼を凝らして見れば。一步步と言文の親睦になりゆく消息は。たしかに之を聞き得る事。また難からざるべし。

第五十一章 當期の名作

増境——徒然草——神皇正統記——太平記——其匾號——其作者——御伽草子

増境は後鳥羽天皇より後醍醐天皇までの物語體歴史なり。作者を一條冬良と傳へたる説は取るに足らず。

徒然草

徒然草は兼好法師の隨筆なり。文中寓意多く。或は世を嘲り或は人を戒め。讀みゆくまに、作者一生の氣概を見るに足る。

神皇正統記

神皇正統記は我國神代より後村上天皇御即位までの論文體歴史なり。作者は北畠親房。皇位の正統全く南朝にある事を知らしめんとて。慨然筆を執りたるもの。满腔熱血の注ぐところを見るべきなり。此書吉野の行宮にて記したりともいひ。又は常陸にて記したるものを吉野へ奉りしともいふ。

太平記

太平記は花園天皇の文保二年より後村上天皇の正平二十二年までの間の。戦亂の顛末を記したる物語歴史なり。此書のことば理盡抄(文明二年今川駿河守入道心性の作)に委しければ引きいてはん。

其匾號

曰く。およそ此書。名を改むること四度。初に安危來由記といへり。二には國家治亂記と號す。三には國家太平記と號す。南朝の正平の作者かくの如く稱す。又太平の名は。延文の頃改めて號すともいへり。四には天下太平記と號す。應安戊申細川武藏入道常久申す。此書の號。南朝の治亂等の號を捨て。當代を賀し奉らんに於ては。何ぞ國家といはんや。同じくは天下太平とて

其作者

あらまほしけれと申されしより。時の學才の人等。天下太平記と號す。と。又曰く。此書は去ぬる建武の頃ほひ。主上二條の馬場殿にて御遊あり。諸卿武臣堂上堂下にあり。新田義貞を召して勅諭あり。宣はく。文治よりこのかた數百餘年。東夷威を重くして天下に普し。朝家の廢頽日に増したり。故に代々の天子。彼を滅ぼし帝徳を四海に照らさんと。徹慮をめぐらされしかども。事成らずして。却つて皇居を遠島に遷され給ひ。又は勢微にして黙止給ひけるに。朕が代に至つて逆臣忽に滅して王法舊の如し。且は後代の爲め。且は當時のもてありびぐさともなるべし。然れば義貞が。鎌倉を攻めし爲體。高氏が六波羅を滅ぼせし形勢。記しおかせばやと仰せらる。時に義貞。天子の御徳普天の下に照らさざらんに於ては。臣等何ぞ尺寸の謀を以て。大敵の勇をくだき侍らんと。勅答申さる。

日數經て後。萬里小路藤房卿勅を承りて。北島の玄恵に仰す。玄恵義貞に會して鎌倉の滅亡を記す。次に高氏直義に會して。かの隱謀並に六波羅の滅亡を記す。今の九十の兩卷これなり。主上敬感ありて玄恵を三品の僧都になさ

る。時に天下の武臣これを聞き傳へて。元弘に有功のものは。我功の隠れて此書に顯はれざる事を恨み。無功のものはこれを羨ましとす。これによつて重ねて玄恵に命を下して。まづ正成が武功を記せしめ給ふ。又玄恵藤房卿に會して。笠置の戦ひ。上御一人より竹苑攝籙に至るまで。東夷の事に苦しみ給ひし事を記す。三四五六の卷これなり。こゝに大塔尊雲法親王妙法院法親王等苦しみ給ひし御事。中にも大塔宮南都吉野十津川にて虎口の難を御のがれありし爲體。玄恵に命じてこれを記せしめ給ふ。又赤松が戦功同じき御作者なり。但し律師則祐會談す。今の七八の兩卷なり。初二卷は山門の來賢法印。玄恵に會談してこれを記す。都合十卷。或は義貞鎌倉の物語といひ。或は高氏六波羅の物語といひ。或は赤松合戦記といふ。正成一人其號をいはず。題號不定なればとて。玄恵智教教圓等に命じ給ふ。時に三僧武士等に會して。物語の前後ならびに虚實を相尋ねて。これを再記す。元享釋書の師に命じて序を書せしむ。題號前に記するが如し。

又建武の頃ほひ主上山門におはせし時。大友小貳が振舞。五大院の右衛門が

爲體。後代の嘲にもとて。山門の護正院に命じてこれを記せらる。正成が死せし爲體。智仁勇の三徳を備へりと淑威のあまり。善智坊法印に仰せてこれを記せらる。十一十六の卷なり。南岸坊の僧正顯信。義貞の奏狀。尊氏の隱謀。直義の惡逆を記す。十三十四の卷なり。時に義貞鷺坂箱根の合戦を自記す。共に十四の卷なり。數年を経て南帝の正平の頃。備後三郎高德入道が吉野にありしに。新帝の勅に依つて。京中の合戦高氏の敗北を記す。十五の卷なり。内多々良濱の合戦壽榮これを記す。又十二の卷直義玄惠に命じてこれを記す。時に直義玄惠に語つて曰く。此書十卷以後はことごとく焼失すべきやと云々。玄惠が曰く斷つべからず。後代の人又燒失の咎を記せん。唯願はくは公の政道の正しからん事をといひし。直義書を燒かずと云々。而して元弘の政の正しからざる事を記す。二十七二十八二十三の卷等これなり。時に高德入道義清。越前の合戦義清の敗北ならびに尊氏直義が一代の惡逆を記す。二十二の卷なり。然るを後に武州入道無念の事に思ひて。一天下の内を尋ね求めてこれを燒失す。今二十二の卷あらはに讀まずと云々。當代にあるとこ

ろの二十二の卷は。二十三より集め出だして二十二と號すとなり。和州多武峰にして此書を記する事十二卷なり。作者六人。教團上人南都の人なり。義清法師高德入道の事なり。壽榮法師玄惠が弟子なり。和州十市の人なり。北畠顯成顯家の男なり。二十六にして出家。法號行意と號す。歌道の達者なり。證意法眼興福寺の住僧なり。日野入道運秀等なり。而して十一の卷より已後。虚實を正し次第をつらねて。虚を除き實を加ふとなり。又永徳壬戌山名氏清南方に發向して歸京の時。義用義可等に仰せて。此書を記する事五卷。都合三十九卷なり。此後此書を記するものなし。年久しく經て。横川の僧天界坊能隣。これを改めて四十卷とす。又應永の頃唐船來朝す。唐の官人明尹此書を所望す。將軍義持諸山の僧に仰せて。これを清書して官人に渡すと云々。と。第七期の盛衰記。文學とり花に過ぎたれ。りの自由自在の翼は。いよく出でいよく進むを見るのみ。當期の末に行はれたる御伽草子の類。また研究しもらすべきものならんや。雅に出で俗を主とし。俗に近くして歌謠調の句法に似せたり。あはれ徳川

時代前期の文學を導きいだしたるは。其功すくなしとせず。

第五十二章 和歌の狀態

和歌の衰運——風雅和歌集——新千載和歌集——新拾遺和歌集——新後拾遺和歌集——新續古今和歌集——新葉和歌集——諸家の家集——連歌——連歌師

南北朝の頃は猶見るべき作おほかりしが。次第に活氣なき模造品となりはてす。兼好頼阿などの數人を残す外は。是ぞと語るべき作者を得ざるこゝ悲しけれ。

此時にあたりて引き續き出でたる勅撰歌集五種あり。曰く風雅和歌集。後村上天皇の興國中に花園上皇の御自撰に成りたるもの。曰く新千載和歌集。同じ御代の正平十四年に。北朝後光嚴天皇の勅を奉じ。藤原爲定の撰びしもの。曰く新拾遺和歌集。同じ十八年に。北朝同帝の勅を奉じ。藤原爲明えらびしを。半にして薨せしかば。頼阿法師の代りて繼ぎたるもの。曰く新後拾

和歌の衰運

風雅和歌集

新千載和歌集

新拾遺和歌集

新後拾遺和歌集

新續古今和歌集

遺和歌集。後龜山天皇の天授元年に。北朝圓融天皇の勅を奉じ。藤原爲遠の撰びしもの。曰く新續古今和歌集。後花園天皇の永享年中。勅を奉じて飛鳥井雅世の撰びしもの。これなり。

うもく醍醐天皇の延喜年中に古今和歌集の出でしより。今この新續古今和歌集の成れるまで。年を経ること凡そ五百有餘年。その間ひまなく勅撰の御舉ありて。斯道を奨勵せさせ給ふこと怠り給はず。うの集つもりて二十一種の多きに登りぬ。特に古今より新古今までを八代集と呼び。新勅撰より後の十三代集と稱へ。これを總稱しては二十一代集と名づけ。歌道の寶典とも仰がれ來りしが。此に至り。勅撰全く別を告げ。再びかゝる御舉を起させ給ふ事もなかりしは。さりとは斯道の衰運。嘆くにも餘りある時勢こゝめぐり來にけれ。

新葉和歌集

二十一代集の内には加はらざれども。南朝の和歌を代表して勅撰に擬せられしものは。長慶天皇の弘和元年に。後醍醐天皇の皇子宗良親王の撰ばせ給ひし新葉和歌集あり。試に卷の首の一ひらを繙き見よ。

出づる日に 春の光は あらはれて

後村上天皇御製

年たちかへる 天のかぐ山

中務卿宗良親王

關守の うちぬるひまに 年こねて

春は來にけり 逢坂の山

御製(後龜山天皇)

風わたる 池の氷も とけりめて

うちいつる波に 春や立つらん

冷泉入道前右大臣

九重の みやこに春や 立ちぬらん

天つ雲井の けさはかすみぬ

中務卿尊良親王

花鳥の 色にも音にも さきだちて

諸家の家集

時しるものは かすみなりけり

なほ其調べの新古今時代と遠からぬや味はくれなん。あはれ亂れに亂れゆく世ならざらましかば。かくてが榮ゆく春の行末にもあふべかりしを。

家集にては兼好法師の家集あり。頼阿法師の草庵集あり。徹書記の草根集あり。くだりて當期末の歌風を紹介するものには三玉集あり。三玉は後柏原天皇の柏玉集。西三條實隆の雪玉集。冷泉政爲の碧玉集の總稱にして。中にも雪玉いたくもてはやされたりといふ。一二の例を示さん。

つばさにや 山風うへて いそぐらん

花におもはぬ 雁のかへるさ

色につき 花になすなよ さてのみが

世にうもれ木の 言の葉の道

あつから新しき調べはあるやうなれども。うの氣韻の衰へはてたるは。三玉時代こり。うの極端に達せしともいふべきなれ。

和歌の衰ふるにも拘はらず。ますく世に行はれゆくは連歌なり。後鳥羽土

連歌

御門順徳の三帝いたく之を好ませ給ひしより。追々に開け來りしが。花園天皇の頃に至り。善阿法師といふもの出で。うの門弟に順覺。信照。救濟。良阿などいふがありて南北朝の頃には専ら此救濟法師宗匠となりつゝ斯通を興しけるが。うれより傳はりく。宗砌心敬より宗祇に至り。宗長。宗傾。宗牧。宗養。紹巴と相續して。いよく和歌をも壓するほどの隆盛をなしたり。

今や上の句に下の句を附け。又は下の句に上の句を附くるなどの簡單なるものならずして。十句二十句五十句より百句までにも及ぶものとなりぬ。此に於て法式も定まり。一派の術となりて遂には武人の社會にもいたく行はれ。豊太閤の陣中などにて翫ばれしは太閤記などを見ても知らるべし。うもく此道。中古より近古の初期までは。心か言葉かの内に。一ふし面白き巧を設けてよみたる事なりしが。今は其事たえて。たゞ常の歌を長く續くるといふ位のものとなり。一種の俗調をさへ帯び來りて。いはゞ交際上の文事とのみ化し果てたる有様なり。請ふ左の作例を見よ。

うらみし文に 又ぢむかへる

若き世に 學ばぬ道は かひもなし

袖にあまるや わが音羽川

せき入れて おとす瀬もがな 老の波

寐ぬときなれや あかつきの秋

わきて聞け 今宵はかのね 申の聲

れもひやるにも うきは後の世

れろかなる 親にだに子は まさらめや

むくは恐ろし 憂くつらきはて

老いぬれば 親をれもはぬ 身をわびて

さびしくなりぬ 山かげの庵

うたて身に 捨てし心や よわるらん

ひとりなわびそ 年の暮方

ことわりに かさなる老は 力なし

心 敬

智 溢

宗 砌

専 順

心 敬

同

同

さだむる事も 人にこうよれ
山がつは 花を都に つけもせで

同

待つとせし間に 世をや盡さん

花さかぬ 若木の春に 身は老いて

宗 砌

水かれ草の 青き葉もなし

瓶にさす 花のさかりは 短くて

能 阿

露うちりぐぐ 庭の草むら

おのづから 虫かふ宿と 荒れはて

行 助

たく火しめれば 月ぞ更けゆく

きりぐぐす 秋の神樂を うたふ夜に

賢 盛

歌人には連歌言葉などゝて嫌はるゝ風調をさへ生み出だしとは。當期にあり。連歌師と名づけて一の専門家をなす。懸物など出だして一種の勝負事のやうになりたるも。又當期にあり。されば連歌の隆盛を來したるは。和歌の衰運を示すの具とも見るべきか。

連歌師

第五十三章 歌謠の進歩

小唄——宴曲——曲舞

小唄

神樂歌催馬樂の昔は遠く。今様歌また今様ならずして。既に前代の遺物たらしんとす。當時民間に行はれたる小唄といふものあり。謠曲に狂言に歌ひ傳へられて。明治の今日現に聞かるところ面白けれ。

若松

あらく目出たや若松の。ことしよりも。殿も徳若民もゆたかに。松もろともに千代かけて。榮ふる末ころ久しけれ。

宇治のさらし

宇治のさらしに。島に洲先に立つ波をつけて。はんま千鳥の友呼ぶ聲は。ちりくやちりく。ちりくやちりくと。友よぶところに。島かけよりも船の音が。かりりころりかりりころりと。漕ぎ出だいて釣するところ。釣つた處が面白いとの。

然れどもかゝる簡單淡泊のものゝみにては。満足すべからざるが人情なり。

宴曲

況んや前期に於て長篇の語物も。既に作り出だされたる今日なるに於てをや。此に於て語物に屬するものには。いはゆる宴曲なるもの出で。謠物には曲舞まじりこそ出で來にけれ。今これを並べ示さん。

春

霞たなびく雲井より。春立ちけりな天の戸の。明くる氣色も閑にて。鶯さうふ春風。かすむとすれど淡雪の。下草は猶結ぼれて。岩間の氷解けやらず。争でか春の越えつらん。勿來の關の東路。うよや有らまほしきは梅が香を。櫻の花に匂はせて。柳が枝に咲かせてしがな。百千鳥。木傳へば己が羽風にも。亂れぬべき物をな。誰におふせてか。啼く音も絶せざるらん。八重款冬紫深き藤浪。汀になびく池の面。取々にやや覺ゆる。しひてや手折らまし。折らしてや挿頭さまじや。三月の永き春日も。猶あかなくに暮しつ。(宴曲)

梅花

夫れ青陽の春を迎へては。南枝の初花先ひらき。仙方の雪にたぐへて。

淺紅芬郁の色をます。若木の梅の垣ごしに。誰袖なれし白妙。老木は深き匂あり。木ずるに春の風をいたむ。凡梅花の徳有りて。其名をあまたに分ちつゝ。催馬樂には梅が枝。香の中には梅花方。色をも香をも君ならず。誰にかみせん難波津に。さくや此花冬籠。今は春なる。浪の初花立ち歸り。見て過ぎ難き花の香や。梅津の里に匂ふらん。かたじけなくも聖廟は。天下の鹽梅。風月の匂香ばしく。春を忘るなとばかりの。言葉の風に誘引はれて。根こじて移る飛梅。琴上に飛びし花の雪。軒端の梅も片敷きて。上枝立枝の薄匂。凝花舎は梅壺。紅梅殿梅園梅の色。榮花にはつぼみ花。やれ梅唐草唐梅。衣の色の妙なるは。つぼみ紅梅梅重。あゝの雪の下の紅梅。義孝の少將が。昔語を思ひ出づる。世尊寺の梅とかや。誰裝蟲のきたるらん。垣根の梅の花笠。五條わたりの春の夜の。在中將が問はずがたり。月やあらぬと讀みけんも。色ならぬ梅の花盛。光源氏に集めしは。薰合の色々。散り過ぎたりし梅の枝に。つけし言の葉の。わりなきは先齋院の其品。紅梅の大臣と聞えしも。此卷に名をや顯

しけん。(宴曲)

夕

夕陽西に傾きて。東にかへりみれば。まだ麓は霧の隔てつと。山より遠の夕日影。さすがに暮れや終ざらん。松のゆきあひの木枯に。つれなき色をのこしても。外の木の葉や時雨らん。夕こえかゝる旅の空。かこつ方なき哀は。夕やわきてまさるらん。夕鹽夕なき夕波千鳥。鳴く音さびしき夕間暮。夕の殊にわりなきは。野分の風も身にしみて。思ひ亂れし節かよ。忘るゝ間なく忘れぬ。夕の空の村雲に。猶立ち迷ふ夕霧の。籬の花の夕しめり。手折りし袖やうぼちけん。夕顔の花咲く宿の主やたれ。たうがれ時の空目は。げにおぼつかなく覚ゆる。夕立の。晴れぬるあとの夕づく日。かげろふかたの涼しきは。雲間をわたる夕風。夕霜の。晩田の稻葉うちなびき。風にたまらぬ夕露は。結びもあへずや亂るらん。墨染の夕の色のすきは。櫛つむ山路のそばつたひ。麓の野守のはるばると。うことも見えぬ歸るさに。時しもあれや入逢の。かね

て思ひし有増より。猶心澄む山蔭の。五百代小田の夕嵐。草の戸ざしの明暮は。袖も干しあへぬ霧の間に。聲よわりゆく故郷の。蓬が袖のきりくす。暮れ行く空の氣色。誰も哀やまさるらん。夕は脆き涙かな。(宴曲)

近江八景

あれに見えたる比良の山。小松が原に吹く嵐は。山市の晴嵐も。かくやらんと思はれ。まのゝ入江の洲崎の真砂は。雪かと思えて。江天の暮雪に異ならず。あら面白やと見る程に。いと心すみ渡る。堅田の浦の釣舟の。沖より家路に急ぐをば。遠浦の歸帆かとうち詠め。雲のむらむら残れるは。夜の雨の名残か。さて比叡山の鐘の聲を。遠寺の晩鐘かとうちきき。うれ幸崎のすさきに。翅を垂るゝ沙鷗。平砂の落鴈に是をなぐらへ。さて洞庭の月には。鏡の山をたどへたり。誰を漁村の夕照に。釣たるゝものと思ふべし。釣たるゝものと思ふべき。(曲舞)

西國下り

壽永二年の秋の頃。平家西海に赴き給ふ。西南の離宮に至り。都を隔つ

る山崎や。せきどの院に。玉の御輿をかきすゑて。八幡の方をふし拜み。南無や八幡大菩薩。人皇はじまり給ひて。十六代の尊主たり。みもすう川の底清く。末をうけつぐ御恵。なごか捨てさせ給ふべき。他の人よりも我人ど。ちかはせ給ふなる物を。西海の波の立ち歸り。二度帝都の雲をふみ。九重の月を詠めんと。深く祈誓申せども。惡逆無道の其積り。神明佛陀加護もなく。貴賤上下に捨てられ。帝城の外に赴く。何と成り行く水無瀬川。山本遠く廻り來て。昔男の音になきし。鬼一口の芥川。月胡箆をたづさへて。駒に任せて打渡り。馴れし都を立ち出で。いづくにぬなの小笹原。ひと夜假寐の宿はなし。あしの葉分の月の影。かくれてすめるこやの池。生田の小野のおのづから。此川波にうきねせし。鳥はいねどもいかなれば。身をかざりとやなげくらん。千山の雨に水まさり。濁れる時は名のみして。さらすかひなき布引の。瀧津白波音たて。雲のいづこに流るらん。五つ手舟の名残に。五百の舟を作りて。みつぎを絶えずはこびしも。武庫の浦こり泊なれ。福原の故郷に若きしか

ば。人々の家々も。年の三とせにあれば。ふくろふ松桂の枝に鳴き。狐蘭菊の草村に隠れすも。なれし名残も浪風の。あら磯やかた住み捨て。唯あまの子の住み所。宿も定めぬ假寝かな。相國の作り置かれし。所々もあれ果て。古宮の軒端月も。金玉をまじへしよそほひ。花のながえをまつめしも。唯今のやうに思はれて。昔ぞ戀しかりける。釋迦一代の雜經。五千餘卷を石に書き。蒼海の底に沈めて。一居の島をつきしかば。數千艘の舟を留め。風波の難をたすけしは。有難かりし形見なり。世をうき浪のよるべなき。身の行末が悲しき。かくて主上を初め奉り。皆御舟にめされけり。ならはぬ旅のうき枕。思ひやるこり悲けれ。南殿の池の。龍頭鷓首の御舟ぞ。思ひながらも寒江に。釣の翁の棹の歌。まだ聞き馴れぬ聲々に。沖なる鷗磯千鳥。友よびつれて立ちさわぐ。風波帆にさかのぼり。櫓聲は月を動かす。和田のみさきをめぐれば。海岸遠き松原や。海のみざりにつぐくらん。須磨の浦にも成りしかば。四方の嵐もはげしくて。關吹き越ゆる音ながら。うしろの山の夕煙。柴と

いふ物ふすぶるも。見なれぬかたのあはれなり。琴の音に。引きとめら
ると詠じけん。五節の君の此浦に。心をとめて筑紫舟。昔は上り今下る。
浪路の末々はかなき。かたぶく月の明石がた。むらぢあまりの年をへて。
問はずがたりの古へを。思ひやるこころ床しけれ。船より車に乗りうつり。
しばし爰にと思へども。須磨やあかしの浦づたひ。源氏の通ひし道なれ
ば。平家の陣にはいかゞとて。又此浦をこぎ出だす。鹽瀬は浪も高砂や。
尾上の松の夕あらし。舟をいづくにさうふらむ。室の泊のときまやかた。
かげはひまもる夕月夜。遊女のうたふ歌の道。うき世を渡る一ふしも。
誠にあはれなりけり。習はぬ旅は牛窓の。瀬戸の落汐心せよ。實に荒け
なき武士の。あづさの月の鞘のうら。にぎはふ民のかまどの關。夢路を
さうふ浪の音。月落ち鳥ないて。霜天にみちてすさまじく。江村の漁火
もほのかに。半夜の鐘の響きは。客の舟にや通ふらん。蓬窓雨したより
て。しらぬ汐路の楫杖。片敷く袖やしをらん。あら磯なみの夜の月。
しづみし影は歸らず。(曲舞)

歌詞につきては語勢句法のさしたる差異あるを見ず。順序をいはゞ曲舞は歌
曲としては宴曲の進化せしもの。舞曲としては自拍子の進化せしものにあ
るらし。この曲舞こころ。更に進化して謡曲をば成したるなれ。委しく次の章
にて語らん。

第五十四章 謡曲の成立

能の名稱——能の起原——猿樂役者——室町將軍と觀阿彌および世阿
彌——幕府の式樂——能の作意——能の作者——五流の起原——豊太
閨と能——謡曲の特長

謡曲の事を語らんとするには。先づ能の起原よりせざるべからず。

能の名稱

能はもと猿樂と稱へしもの。即ち藝能の能の字にして。一番の能をするとい
ふは。一番の藝をするといふが如きなり。猿樂の名の起りには古來諸説あり。
或は猿樂田樂もと同類なるが故に。田の字の棒を上下引き延ばして申樂と書
きたるに始まるともいひ。又は神樂より出でたるものなれば。神の字のツク

能の起原

リを取りて申樂と名づけしともいへど。何れも俗説にして取るに足らず。散樂の文字を音の近きによりて。猿樂と書きかへたりといふを正しとすべし。散樂とは支那にて民間の俗樂を稱ふる名にて。我國にも。音樂種々の散樂を奏すなどいふ明文。かれこれ古書に見えなければなり。故に始は田樂の能と區別して。猿樂の能と稱へしが。田樂すたれて猿樂ひとり榮えしかば。或は猿樂ともいひ。或は能とばかりもいふ事となりしなり。

能の始は神樂より出づ。國々の社々に附屬して。祭典に歌舞を奏するを役目とせしもの。伊勢には和屋。勝田。主門の三座ありて大神宮に奉仕し。近江には山階。下坂。比叡の三座ありて日吉社に奉仕し。丹波には本座。河内には新座。攝津には法成寺座ありて加茂住吉の兩社に奉仕し。大和には圓満井。結崎。外山。坂戸の四座ありて春日社に奉仕しつゝ。おのゝ其業に従事せり之を猿樂役者といふ。

今も其家々にて翁なまこといふ曲を秘事となし。忝くも大神宮を表し奉ると稱へて。之を演ずる前には役者必ず別火潔齋し。之に次いで神能とて。神社の縁起。

猿樂役者

室町將軍と觀阿彌および世觀

神徳の來由などを作りたるものを尊しとし。重き傳授事となしたるは。取りも直さず能の神事に出で。神職の手に生長せし時代の遺風なるが知らるゝなり。

かくて室町將軍足利義滿の時に至り。かの結崎家に三郎清次といひしものあり。この藝を能くせしがため。義滿に召されて童坊となり。名を觀阿彌くわんあみと改め。其子世阿彌よあみ元清も父に繼いで將軍の寵を受けしかば。大に能樂擴張の機會を得。殊に父子とも學問あるものなりしが故に。これまで謠ひ來りし曲舞の文句に前後を加へなどして。古作を増補し新作を組立てつゝ。その進歩を圖りしかば。節定まり舞整ひて世に行はるゝ事も著るく。遂に將軍家の歌舞となりて。儀式典禮に用ひらるゝこと。恰も雅樂の朝廷の式樂として用ひられしが如き勢を成したり。

幕府の式樂

能の作意

されば能樂は。その起原こそ神事より來りたれ。今は堂々たる幕府式樂の資格を備へざるべからず。此に於て神祇釋教に寄せ鶴龜松竹梅に寄せて。世を祝ひ君を祝ふの祝言能も出で來れり。然れども是は儀式的にして武人社會の

能の作者

娛樂に供するの點よりすれば。外に感情の的興味あるもの。歴史的の勇壯なるものも望まじからざるに非ず。此に於て忠臣孝子慈母節婦の事を作れるもの。及び保元平治。八島壇浦の合戦を述べたるものも出で来れり。その作者は結崎父子を始として。多くの能役者の手に出でたりと。傳へられたれども。それはおもに節附をし手附をして。一番の能に仕組めるものをいへるなれば。文句の著者に至つては。大概佛者なりけん事。かの江口山姥の二曲は一休和尚の作。卒都婆小町は高野の看快上人の作といへるにても思ふべし。これ徹頭徹尾佛法を以て其經とし。人情を以て其緯とせし作が。十の七八に居るゆゑんにして。却りて他の冷淡無味なる無主義歌曲に優るゆゑんがかし。

五流の起原

かくの如くにして結崎氏は代々足利家の猿樂太夫となり。観世と改姓してまづく斯道の祖家と仰がれしが。此隆盛の時運に達するを見て。共に進み出でたるもの。観世の外に三家あり。曰く今春。古の圓満井の改姓せしもの。曰く寶生。古の外山の改姓せしもの。曰く金剛。古の坂戸の改姓せしもの。

豊太閤と能

以上これを四座と稱して。おの／＼一流を立て。互に對等の陣を張つて研磨する事おこたりなかりき。後に喜多七太夫といふもの一家を起して喜多流と呼ばれ。つひに五流とはなりにけり。足利氏ほろびて後。嗜好を専ら斯道に寄せたる英雄は。豊太閤一人あるのみ。豊太閤はみづから扇を取つて舞ひたるのみならず。時の連歌師由己法橋に命じて數番の能を新作せしめしこと。太閤記に見ゆ。芳野花見。高野參詣。明智。柴田。北條の五番これなりき。

謡曲の特長

能の起原は大略かくの如し。うも／＼此能と之に用ふる謡曲とが。從來の語物謡物に對して。いくばくの進歩をあらはし。いかに獨得の妙を發揮せしかといふに。まづ語る部分と謠ふ部分との特性を立て。語るところは對話なれば。通俗なる言語を主とし。謠ふところは歌謠なれば。優雅なる文語を主とす。然れども其互に一致親睦して木に竹を織ぎたる如き痕跡なし。是れすぐれたる第一なり。從來の曲舞には謠ふところあれども語る處なく。平家物語の如きは語る處も謠ふ處もあれども。記者の語り若しくは謠ふ言葉にして。

其人自身が語り且つ謠ふところなし。能にはシテ(主人公ツレ)助役ワキ(相手役)などの役者ありて其語り且つ謠ふ文句を發聲し。別に地謠なるものありて記者の謠ふべき處を同吟す。故に問答あり對話ありて是までの歌謠よりも規模を大きくせり。是れすぐれたる第二なり。

難波の浦のよしあしも。いやしき海士は得ず知らぬ。たゞ世を渡るためなれば。假の命つがんとて。蘆を取り運びて。此市に出づる蘆敷に。おあしうへて召されよや。おあし添へて召されよ。露ながら難波の蘆を刈り持ちて。夜は月をも運ぶなりや。いとまをし夕汐の。晝の内に召されよや。ひるの内に召されよ。

月影まで載せて運ぶにより。今日の營業に別るゝ事のなごりをしきをいふなど。優美きはまりなきを見る。謡曲には此種の作多し。歌謠としての價は。是までの作に稀なるものあるを見出だすべし。是れすぐれたる第三なり。かの義經主従が安宅の關にかゝらんとせし時の問答を聞かずや。

義經「いかに辨慶。

辨慶「おん前に候。

義經「唯今旅人の申して通りつる事を聞いてあるか。

辨慶「いや何とも承らず候。

義經「安宅の湊に新關を立て。山伏を堅く撰むとこそ申しつれ。

辨慶「言語道斷の御事にて候ふものかな。さては御下向を存じて立てたる關と存じ候。これはゆゑしき御大事にて候。まづ此傍にて暫く御談合あらうするにて候。

一人「我等が心中には何程の事の候ふべき。唯打ち破つて御通りあれかしと存じ候。

辨慶「暫く。仰の如く此關一所打ち破つて御通りあらうするは安き事にて候へども。御出で候はんずる行末が御大事にて候。唯何ともして無異の儀が然るべからうずると存じ候。

義經「ともかくも辨慶はからひ候へ。

一寛一嚴。或は緩に或は急に。君臣老若の分を得たる談合。さながら今も耳に其人の聲を聞くの感あり。謠曲にはかゝる筆を用ひて常に其人の特性を分ち示す。他の作の及ぶところならんや。是れすぐれたる第四なり。謠曲には些少なる材料を大きくして誠らしく作り成したるもの多し。後撰集の和歌を本として鬼女の事になしたる安達原一名は黒塚の如き。雅樂にある單純なる胡蝶の舞を化して。梅花に縁なき事を嘆くのみ。法華經の功德をたのみ遂に志を遂げたる趣になしたる胡蝶の如き。豈あちはふべきものならざらんや。是れすぐれたる第五なり。

あはれかくまでに文として歌として發達進歩をなしたる謠曲あり。當期の文學を代表せしむるに餘りあるものといふべきなれ。謠曲何ぞ婚禮の席の私有物ならんや。能樂何ぞ祭禮奉納者の専有物ならんや。此暗黒時代の末世を破りて。一點の電氣燈を掲げたるは。此文こゝあり。此歌こゝあり。

第五十五章 滑稽の文學

能と狂言

狂言は滑稽的
文學の開祖

能と狂言——狂言は滑稽的文學の開祖——狂言の妙處

能は喜怒哀樂の情をあらはして。人を感ぜしめつゝ美の觀念を興ふるところの術なり。然れども笑はしめつゝ教ふるの點に至りては。全く之を缺きたるのみならず。寧ろ正反對ともいふべきものなり。こゝに於て一番の能をばる毎に演ずる狂言を得つ。狂言は徹頭徹尾滑稽諧謔を以て組立てられたるものなるが故に。かのまじめなる能と反映して。變化の妙こゝ味はるゝなれ。萩大名に曰く。

大名「罷り出でたるは隠れもない大名。このちう御前に詰めてあれば心が何とやら屈して御座る。太郎冠者を呼び出だし。何方へ遊山に参らうと存ずる。有るかやい。」

冠者「御前に。」

大名「汝を呼び出だすは別儀でない。何方へ遊山に行かうと思ふが何とあらう。」

冠者は。内々は御意ならでも申し上げうと存ずる處に。一段でござりま

せう。

大名「よからうな。

冠者「は。

大名「何と西山東山はいつもの事。様子の違うた處へ行きたいが。どこもどがよからうな。

冠者「誠に御意の通り西山東山はいつもの事で御座る。さればどこもどがようござりませうぞ。はあ思ひつけて御座る。是よりも下京邊に心やさかたな御方が御座る。事の外の庭ずきで御座る。是への御遊山がよう御座りませう。

大名「おゝ是が一段よかろ。うれへ向けて行かうぞ。

冠者「は。さりながら是へ御座ればお歌をなされねば成りませぬ。

大名「うれは如何やうな事をよむぞ。

冠者「三十一文字の言の葉を傳へた事でござる。

大名「あゝこりやなるまいわい。

冠者「は。申し上げまする。

大名「何とした。

冠者「うれがし上京邊を通つて御座れば。若い衆の見物に御座らうとあつて。萩の花につけて匂づくろひをなされたを聞いて参りまして御座る。お前にをすへませう。

大名「やい冠者。其庭にも萩の花があらうかな。

冠者「殊に亭主すきまするのが萩で御座りまする。

大名「ふん其儀ならば急いでをすへい。

冠者「畏つて御座る。七重八重九重とこり思ひした。十重さきいづる萩の花かな。と申す事でござる。

大名「ふん。してうればかりか。

冠者「はあ。

大名「いやそれほどの事ならばよまう程に急いでこい。

冠者「畏つてござる。

大名「こい〜。やい冠者。して今の歌のいひだしは何であつたぞ。

冠者「忘れさつしやれて御座るか。七重八重でござりまする。

大名「お〜うれぢや。して其あとは。

冠者「申し殿様。是では成りませぬ。

大名「お〜成るまいわい。急いでもどれ。

冠者「申し殿様。

大名「なんぢや。

冠者「さりながら物によりへたら。覚えさつしやれませうか。

大名「よう〜ものによつて覚えうず。

冠者「すなはち扇の骨によりへませう。七重八重と申す時に七本八本ひろ

げませう。九重と申す時に九本ひろげませう。十重さきと申す時に皆ひ

ろげませう。

大名「お〜是はよいよう〜ものぢやわい。してまだ其跡があるぞよ。

冠者「はあ是はよそへ物が御座る。

大名「うれは何によりへるぞ。

冠者「すなはち身共をば臍^{はら}ばかり伸び居つてとあつて。折檻なされます

る。其はぎをば思ひださつしやれませう。(下略)

狂言の妙處

いかに文旨にして威張のみ強かりし大名を嘲り盡して愉快ならずや。而して事滑稽に出で〜聞く人を立腹せしむるの嫌なし。あはれ當時に大喝采を博せしこと知るべきのみ。

かく大名の愚をあらはしたる作を始とし。僧を嘲り。山伏を嘲り。鉦を嘲り。妻を嘲り。田舎者を嘲り。悪徒を嘲り。臆病者を嘲り。狡猾者を嘲り。酒飲を嘲り。しわん坊を嘲り。遂には鬼を嘲り雷を嘲りたる作さへ出で來ぬ。何が材料の豊富にして作意の無邪氣なるや。

今は一々に之を評論するの暇を持たず。たゞ滑稽文學の開祖として。之を漱^{すく}迎せざるべからざると共に。之を生長し發達せしめたる足利時代に謝辭を贈るべきを忘るべからず。

第五十六章 著名の作者

藤原爲兼

爲教の子。爲家の孫なり。玉葉和歌集を撰ぶ。正二位權中納言に進みしが。事に坐して佐渡に流され。程なく召しかへされたり。剃髮して蓮覺と號し。元弘二年葬じぬ。

藤原爲世

爲氏の子。爲家の孫なり。新後撰和歌集および續千載和歌集を撰ぶ。正二位權大納言に至り。剃髮して明釋と號し。延元三年八十九歳にて薨じり。

兼好法師

京都吉田の神官に卜部兼顯といひし人に四人の子あり。長は慈遍。大僧正に任ぜられ。次は兼雄。從五位上となりぬ。其次に兼矩といふを隔て。兼好は末子なりき。花園天皇の延慶二年。後宇多上皇の院宣を奉じ。兄の兼矩と共に。神詠部類十五卷を撰定して奉りしかば。兼好これによりて從六位下左馬助となり。尋いで左兵衛佐に進む。是より上皇の御寵を得たり。

後醍醐天皇の正中元年。上皇崩御ありしかば。哀悼に堪へずして剃髮し。兼好の文學を其まゝ用ひて。カネヨシをケンコウと呼びかへたり。時に年四十二。

兼好僧となりて猶京都にあり。兄兼雄罵つて曰く。既に世を遁る。何ぞ高麗もろこしにも赴かざる。京中の出家は一門の汚辱なりと。兼好去つて木曾に遊ぶ。山川の風景一として心に叶はざるはなし。

思ひ立つ 木曾の麻衣 淺くのみ

染めて止むべき 袖のいろかは

とよみて庵を結びしに。或る日國守鷹狩に來りて。庵のあたりを騒がす事あひたし。兼好これにも得たへずして。

こゝも又 うき世なりけり ようながら

思ひしまゝの 山里もがな

と口ずさみつゝ再び都にかへる。間もなく伊賀權守橘成忠に招かれて伊賀に下り。其家に住む事三年。うの間に紀伊の玉津島に詣で。大和の吉野に遊べ

り。是より先。在俗の時も屢ば旅して。但馬の温泉に至り。四國に下り。武藏の金澤に住みたる時の歌など。家集に見えたり。

此に於て再び武藏の金澤に遊び。又或る時は攝津の安倍野に住みて。弟子の寂閑。侍童の命松丸と共に菴を織り。わづかに生計を立てたる事もありき。のち京都に歸りて雙岡に草庵を結び。庭に櫻を植ゑて塔婆を建て。

植ゑおきし 花とならびの 岡のへに

あはれ幾世の 春をすぐさん

と一首の歌を彫りつけたり。六十一歳の時なりき。

かくて又吉田山神宮寺に住みけるが。其頃頼阿法師と共に。内野に於て六時念佛を執行し。大釜に粥を煮て貧民に施したり。

神宮寺焼失せし後は。比叡山の横川に住みて法華經四卷を書寫し。其常に畏敬する顯基中納言の記を作れり。また和歌俊秘抄と柿本秘式とに讀方を附して。朝廷に奉りしかば。其賞として權僧都を賜ひたれども。固く辭して受けざりき。

興國五年頼阿と同行して伊勢に下り。阿濃明神に七日通夜して寐覺友を著はせり。その頼阿と金蘭の交ありしは。兼好ある時頼阿に窮迫を訴ふるとて。米たまへ錢もほしといふ事を沓冠にして。

よもかゝじ。ねざめのかりほ。たまくらも。

ま袖も秋に。へだてなきかぜ

といひやりたるに。頼阿よねは無し錢すこしといふ事を。同じく沓冠にして。

よねは無し。ねたく我せこ。はてはこず。

なほざりにだに。しばし訪ひませ。

と返歌せしなどにて思ふべし。

後村上天皇の正平五年。再び伊賀の國見山の麓。田井莊にありて没す。年六十八。その跡にのこりたるものは。古筆の經文。自筆の老子經。源氏物語須磨明石の卷。頼阿筆の幻の卷。神代紀二冊。反故手習の卷十二包。墨の衣二襲のみ。其他は飯器と衾となりしといふ。

北畠親房

南朝の忠臣に其人ありと知られたる北畠親房は。また文學史中の忠臣なりき。權大納言師重の子にて大納言たり。元徳二年剃髮して宗玄と號す。元弘三年。後醍醐天皇隱岐より還御ありし後。再び仕へて朝敵追討に功ありし爲め。正平五年准三后と爲り。同じき九年一説には十四年薨せり。年六十七。著はすところ。職原抄。元々集。二十一社記。古今集注。東家秘傳。神皇正統記あり。

頼阿法師

下野守二階堂光貞の子にて。在俗の名は貞宗。下總守にてありき。幼少の時延暦寺にありて佛經に通ぜしかば。遂に僧となりて名を泰尋と改む。後高野山に登りて。感空と改め。又頼阿と改め。再び京都に歸り住みたり。かつて藤原爲世に和歌を學びしが。爲世没して後また己を知るものなきを嘆じ。再び歌をよまざりしかば。光嚴天皇いたく之を惜しみ。關白良基をして諭さしめ給ひぬ。此時の良基と頼阿との問答數件を良基みづから筆記し。名づけて愚問賢註といへり。のち足利尊氏に招かれて。其和歌の會に臨む事も

しばしなりき。

正平年中後光嚴天皇の勅を受けて。藤原爲明と共に新拾遺和歌集を撰ぶ。其成らぬ先に爲明没せしかば。戀部以下は頼阿一人して之を撰びたり。時に兼好。淨辨。慶運の三僧と共に名を齊しうして。和歌の四天王と呼ばれしが。一日相會して。題を探り各六首づよむ。頼阿は題を開き見たるまゝにて。席を立ち外出せしが。慶運ひうかに己が題と兼好の題と取り替へおきたり。頼阿は道にて意匠を按じ。座にかへりて筆を執らんとするに。題みな前のものに非ざりしかど。少しも意に介せざるものゝ如く。更に新題の六首をよみたり。いかに三僧相かへりみてつぶやきけん。老後嵯峨小倉山の庵を良基より得て住みけるが。また東山雙林寺に移りたり。文中元年没す。年八十四。著述には井蛙抄あり。家集を草庵和歌集といふ。

正徹

歌人なり。京都東福寺の書記なりしかば。徹書記とも呼ばる。清嚴は其號なりき。後花園天皇の長祿三年没す。家集を草根集といふ。

一條兼良

姓は藤原。左大臣從一位關白經嗣の第二子にして。太政大臣攝政關白たり。文明五年剃髮して覺惠と號す。世には一條禪閑また後成恩寺殿と呼ばれたり。博學多識にして著書頗る多く。殊に連歌を好みしかば。之を撰び集めて新玉集と名づけ。奏覽を経て勅撰に擬せんとせしに。應仁の兵火に奪ひ去られて。又一枚をだに遺さざりしといふ。文明十三年八十歳にて薨せり。

著述の名あるものを擧ぐれば。公事根源。文明一統記。樵談治要。東齋隨筆。桃華藥葉。花鳥餘情。歌林良材。藤川記。小夜寢覺などなり。

三條西實隆

姓は藤原。内大臣公保の第三子にて。正二位内大臣に至る。永正十三年剃髮して諸國の名勝を訪ひ。高野山に登る。紀行あり高野詣日記とて世に知らる。和歌をよくし。雪玉集の著あり。天文六年薨す。年八十三。

第五十七章・散文の作例

承久の亂

作者しらす

さても院のおぼし構ふる事。忍ぶとすれどやうく漏れ聞えて。東さまにもうの心づかひすべかあり。あづまの代官にて伊賀の判官光季といふものあり。かつぐかれを御勘事によし仰せらるれば。御方に參るつはものどもおしよせたるに。遁るべきやうなくて腹切りてけり。まづいじめでたしとぞ院は思し召しける。

あづまにもいみじうあわてさわぐ。さるべくて身の失すべき時にこそあなれと思ふものから。討手の攻め來りなん時に。はかなきさまにて戸をさらさじ。おほやけと聞ゆとも自ら志給ふことならねば。かつは我身の宿世をも見るばかりと思ひなりて。弟の時房と泰時といふ一男と。二人をかしらとして。雲霞のつはものをたなびかせて都にのぼす。

泰時を前にすゑていふやう。おのれを此度都にまおらす事は。思ふ所おほし。本意の如く清き死にをすべし。人にうしろ見えなんには。親の顔また見るべからず。今をかざりとおもへ。賤しけれども義時。君の御

ためにうしろめたき心はある。されば横さまの死にをせむ事はあるべからず。心を猛くおもへ。あのれ打ち勝つものならば。二度この足柄箱根山は越ゆべしなど。泣く／＼いひきかす。

まことに去かなり。又親の顔をがまん事もいそあやふしと思ひて。泰時も鎧の袖をまぼる。かたみに今やかざりと。あはれに心ぼろげなり。かくて打ち出でぬる又の日。思ひかけぬほどに。泰時只一人鞭を上げて馳せきたり。父むねうちさわぎていかにと問ふに。軍のあるべきやう大方のおきてなどをば。仰の如くうの心を得侍りぬ。若し道のほとりにも。計らざるに辱く鳳盤を先だてて御旗をあげられ。臨幸の嚴重なる事も侍らんに参りあへらば。うの時の進退いかぞ侍るべからん。この一事をたづね申さんとて。一人馳せ侍りきといふ。

義時とばかり打ち按じて。かしくも問へるをのこかな。うの事なり。まさき君の御輿に向ひて。弓を引くことはいかぞあらん。さばかりの時は胃をぬき弓の弦をきりて。偏にかしくまりを申して。身をまかせ奉るべし。さはあらで君は都におはしましなごら。軍兵をたまはせば。命をすてゝ千人が一人になるまでも戦ふべしと。いひもはてぬに急ぎたちにけり。

都にも思しまうけつる事なれば。ものゝふども召しつごへ。宇治勢田の橋もひかせて。敵を防ぐべき用意心ことなり。公經の大將一人のみなん。御孫のこともさる事にて。北の方一條の中納言能保といふ人のむすめなり。その母北の方は故大將のはらからなれば。一方ならずあづまを重くおぼして。さしいらへもせず。院の御心の輕き事とあぶながり給ふ。(中略)いつの年よりも五月雨はれまなくて。富士川天龍などえもいはずみなきりさわぎで。いかなる龍馬も打ちわたしがたかりければ。攻めのぼる武者どもとあやしくなやめり。かゝれども遂に都近づくよじきこゆれば。君の御武者もいでたつ。その勢六萬餘騎とかや。宇治勢多へ分ちつかはず。世の中ひびきのゝしるさま。言の葉も及ばずまねびがたし。あるは深き山へ逃げこもり。遠き世

界におちくだり。すべて安げなくさわざみちたり。いかゞあらんと。君も御心亂れておぼしまどふ。かねては猛く見えし人々も。まことのきはになりぬれば。いと心あわたしく。色を失ひたるさまどもたのもしげなし。

六月二十日あまりにや。いくばくの戦だになくて。遂にみかたの軍破れぬ。荒磯に高沙などのさしくるやうにて。泰時と時房と亂れ入りぬれば。いはん方なくあきれて。上下たゞ物にがあたりまどふ。

あづまよりいひおこするまゝに。かの二人の大將軍はからひおきてつゝ。保元のためしにや。院の上都の外にうつし奉るべしと聞ゆれば。女院宮々所々におぼしまどふ事さらなり。本院は隱岐の國におはしますべければ。まづ鳥羽殿へ網代車のあやしげなるにて。七月六日入らせ給ふ。今日をかぎりの御ありき。あさましうあはれなり。ものにもがなやと思さるゝもかひなし。

りの日やがて御ぐしおろす。御年四十に一つ二つや除らせ給ふらん。ま

だいとほしかるべき御程なり。信實朝臣召して。御姿うつし書かせらる。七條の院へ奉らせ給はんとなり。

かくておなじき十三日に御船にたてまつりて。遙なる浪路を志のぞおはします御心地。この世のおなじ御身とおぼされず。いみじういかなりける代々のむくいにかと恨めしく。新院も佐渡の國にうつらせ給ふ。

まことや七月九日。帝をもおろし奉りき。この四月かよ。御讓位とてめでたかりしに。夢のやうなり。七十餘日にており給へるためしも。これやはじめなるらん。もろこしにぞ四十五日とかや位におはする例ありけるとぞ。唐のふみ讀みし人のいひし心地する。うれもかやうの亂れやありけん。

さて上達部殿上人。うれより下はた残るなく。この事にふれにしたぐひは。重く軽く罪にあたるさまいみじげなり。(増鏡)

四季

兼好法師

をりふしの遷り變ること。物ごとに哀なれ。物のあはれは秋こりまされ

と。人ごとにいふめれど。うれもさる物にて。今一きは心も淨きたつ物は。春の景色にこりあめれ。

鳥の聲なども。ことの外に春めきて。長閑なる日影に。垣根の草萌え出づる頃より。やゝ春深く霞みわたりて。花もやうくけしきだつほどこりあれ。をりしも雨風うち續きて。心あわたしく散り過ぎぬ。青葉になり行くまで。萬に唯心をのみぎなやます。花橘は名にこりあへれ。猶梅の匂にぞ。いにしへの事も立ちかへり。戀しう思ひ出でらるゝ。山吹のきよげに。藤のおぼつかなきさましたる。すべて思ひすて難き事多し。灌佛の頃。まつりの頃。若葉の梢すゞしげに繁り行く程こり。世の哀も人の戀しさもまされど。人の仰せられしこり。實にさる物なれ。五月菫蒲ふく頃。早苗とる頃。水鶏の叩くなど。心ぼりからぬかは。六月の頃。あやしき家に。夕顔の白く見えて。蚊遣火ふすぶるもあはれなり。水無月祓またをかし。

七夕まつるこりなまめかしけれ。やうく夜寒になるほど。雁鳴きて來

る頃。萩の下葉色づくほど。早稲田刈り乾すなど。取り集めたることは。秋のみぞ多かる。又野分の朝こりをかしけれ。言ひつゞくれば。皆源氏の物語枕草子などに。事ふりにたれど。おなじ事又今更にいはいはじにもあらず。おぼしきこと言はぬは。腹ふくるゝわざなれば。筆に任せつゝあぢきなきすさびにて。かいやりすつべき物なれば。人の見るべきにもあらず。

さて冬枯の景色こり。秋にはをさくおとるまじけれ。汀の草に。紅葉の散り留まりて。霜いと白う置けるあした。遣水より烟のたつこそをかしけれ。年の暮れはてゝ。人ごとに急ぎあへる頃ぞ。又なくあはれなる。すさまじき物にして。見る人もなき月の寒けく澄める廿日あまりの空こそ。心ぼそき物なれ。御佛名。荷前の使たつなどぞ。あはれにやんごとなき。公事ども繁く。春のいうぎにとり重ねて。催し行はるゝさまがいみじきや。追儺より。四方拜につゞくこりおもしろけれ。

晦日の夜。いたう暗きに。松どもともして。夜半すぐるまで。人の門叩

き走りありきて。何事にかあらん。ことごとくしくのふりて。足を空にまどふが。曉がたより。さすがに音なくなりぬるころ。年のなごりも心ぼろけれ。亡き人のくる夜とて。魂まつるわざは。このころ都にはなきを。東の方には。猶することにてありしこそ。あはれなりしか。かくて明けゆく空のけしき。昨日に變りたりとは見えねど。ひきかへ珍しき心地する。大路のさま松たてわたして。花やかにうれしげなるこそ。またあはれなれ。(徒然草)

仁和寺の法師

同じ人

仁和寺にある法師。年よるまで石清水を拜まざりければ。心うく覺えて。ある時思ひたちて。たゞひとり徒歩よりまうでけり。極樂寺高良などを拜みて。かばかりと心得て歸りにけり。さて傍への人に逢ひて。年ごろ思ひつる事はたし侍りぬ。聞きしにも過ぎて。尊くこそおはしけれ。うも参りたる人ごとに山へ登りしは。何事かありけん。ゆかしかりしかど。神へ参るころ本意なれと思ひて。山ま

では見ずとぞいひける。すこしの事にも。先達はあらまほしきことなり。これも仁呼寺の法師。童の法師にならんとする名残とて。おのくありぶ事ありけるに。酔ひて興に入るあまり。傍なる足鼎を取りて。頭にかづきたれば。つまるやうにするを。鼻を押しひらめて。顔をさし入れて舞ひ出でたるに。満座興に入ること限なし。

しばし奏で後。抜かんとするに大かた抜かれず。酒宴ことさめて。いかゞはせんと誠ひけり。

とかくすれば。首のまはり缺けて血垂り。たゞはれにはれみちて。息もつまりければ。うち割らんとすれど容易くわれず。響きて堪へがたかりければ。かなはですべきやうなくて。三つ足なる角の上に。帷をかけて。手を引き杖をつかせて。京なる醫師のがり率て行きける道すがら。人の怪しみ見ることを限なし。

醫師のもとにさし入りて。向ひ居たりけんありさま。さこそ異やうなりけめ。物をいふもくもり聲に響きて聞えず。かゝる事は文にも見えず。

傳へたる教もなしといへば。又仁和寺へ歸りて。親しきもの老いたる母など。枕上に寄り居て泣き悲しめども。聞くらんとも覺えず。かゝるほどにある者のいふやう。たとひ耳鼻こり切れうすとも。命ばかりはなどか生きざらん。たゞ力をたてゝ引き給へどて。髓のしへをまはりにさし入れて。かねを隔てゝ。首もちぎるばかり引きたるに。耳鼻かけうげながら抜けにけり。からき命まうけて。久しく病み居たりけり。
(徒然草)

ますほの薄

同 心 人

あるもの子を法師になして。學問して因果の理りをも知り。説經などして世わたる便りともせよといひければ。教のまゝに説經師にならんため。まづ馬に乗り習ひけり。輿車もたぬ身の導師に請ぜられん時。馬なご迎へにおこせたらんに。桃尻にて落ちなんは心愛かるべしと思ひけり。次に佛事の後酒などすゝむる事あらんに。法師のむげに能なきは。檀那すさましく思ふべしとて。早歌といふことを習ひけり。二つのわざやう

く境に入りければ。いよ／＼よくしたくおぼえて嗜みけるほどに。説經ならふべき隙なくて年よりにけり。

この法師のみにもあらず。世間の人なべてこの事あり。若きほどは。諸事につけて身をたて。大きな道をもなし。能をもつき。學問をもせん。行末久しくあらず事ども。心にはかけながら。世を長閑に思ひてうち怠りつゝ。まづさしあたりたる目の前の事にのみまざれて。月日を送れば。こと／＼になす事なくして身は老いぬ。遂に物の上手にもならず。思ひしやうに身をも持たず。悔ゆれども取り返さるゝ齡ならねば。走りて坂をくだる輪の如くに衰へ行く。

されば一生のうち。むねとあらまほしからんことの中に。いつれか勝るとよく思ひくらべて。第一の事を按じ定めて。うの外は思ひすてゝ一事を勵むべし。一日のうち。一時のうちにも。あまたの事の來らん中。すこしも益のまさらん事を營みて。その外をばうちすてゝ。大事をいうぐべきなり。

何方をもすてじと心に取り持ちては。一事も成るべからず。たとへば碁を打つ人。一手も徒にせず。人にさきだちて。小をすて大につくが如し。うれにとりて。三つの石をすて十の石につくことは易し。十をすて十一につくことは難し。一つなりとも勝らんかたへこつつくべきを。十までなりぬれば惜しく覺えて。多くまさらぬ石にはかへにくし。これをも捨てず。かれをも取らんと思ふ心に。かれをも得ず。これをも失ふべき道なり。

京に住む人。急ぎて東山に用ありて。既に行きつきたりとも。西山に行きて。その益まさるべき事を思ひ得たらば。門より歸りて。西山へゆくべきなり。こゝまで来つきぬれば。この事をばまづ言ひてん。日をさゝぬことなれば。西山の事はかへりて。又こゝろ思ひたゞめと思ふ故に。一時の懈怠即ち一生の懈怠となる。これを恐るべし。

一事を必ず成さんと思はゞ。他の事の破るゝをも痛むべからず。人の嘲をも耻づべからず。萬事にかへずしては。一つの大事成るべからず。

人のあまたありける中にて或る者。ますほの薄まうほの薄などいふことあり。渡邊の聖この事を傳へ知りたりと語りけるを。登蓮法師の座に侍りけるが聞きて。雨の降りけるに。蓑笠やある貸し給へ。かの蓮のこゝと習ひに。渡邊の聖のがり尋ねまからんといひけるを。あまりに物騒がし。雨やみてこゝろと人のいひければ。むげの事をも仰せらるゝ物かな。人の命は雨の晴間をも待つものかは。我も死に聖も亡せなば。尋ね聞きてんやとて。はしり出で行きつゝ習ひ侍りにけり。申し傳へたるこゝろ。ゆゑしとありがたうおぼゆれ。

敏き時はすなはち功ありとぞ。論語といふ文にも侍るなる。この薄むいぶかしく思ひけるやうに。一大事の因縁をぞ思ふべかりける。(徒然草)

平治の亂

北畠親房

第七十八代二條院。諱は守仁。後白河の太子。御母は贈皇太后藤原の懿子。贈太政大臣經實の女なり。戊寅の年即位。己卯に改元。年號を平治といふ。

右衛門督藤原信賴といふ人あり。上皇いみじく寵ぜさせ給ひて。天下の事をさへ聽かせらるゝまでなりければ。驕りの心も萌して。近衛大將を望み申しとを。通憲法師いさめ申してやみぬ。りの時源義朝朝臣が。清盛朝臣におさへられて。怨をふくめりけるを。相かたらひて。叛逆を思ひ企てけり。保元の亂には義朝が功高く侍りけれど。清盛は通憲法師が縁者になりて。殊の外に召し使はる。通憲法師清盛等をうしなひて。世をほしきまゝにせんぞ計らひける。

清盛熊野に詣でける隙を伺ひて。まづ上皇御座の三條殿といふ處を焼き。大内に遷し申し。主上をも傍におしこめ奉る。通憲法師逃れがたくなかりけん。自らうせぬ。りの子どもやがて國々へ流し遣はず。

通憲も才學あり心も賢かりけれど。己が非を知り。未萌の殃を防ぐまでの。智分や缺けたりけん。信賴が非をば諫め申しけれど。我子どもは顯職顯官に昇り。近衛中將などにさへなし。參議以上にあがるもありき。かくてうせにしかば。これも天意にたがふ所有りといふことは疑なし。

清盛この事を聞き。道よりのぼりぬ。信賴かたらひ置きける近臣等の中に。心變りする人々ありて。主上上皇をしのびて出だしまつり。清盛が家に遷し申してけり。すなはち信賴義朝等を追討せらる。ほどなく討ちぬ。信賴は捕はれて首を斬らる。義朝は東國へ志して逃れしかど。尾張の國にてうたれぬ。りの首を梟せられにき。

義朝重代の兵たりしうへ。保元の勳功捨てられがたく侍りしに。父の首を斬らせたりしこと。大きな咎なり。古今にも聞かず和漢にもためし無し。勳功に申しかふることも。自ら退くとも。なか父を申したすくべき。道無かるべき。名行かけはてにければ。いかでか終にりの身を全くすべき。滅びぬることは天理なり。凡るかゝる事は。りの身の咎はさることにて。朝家の御あやまりなり。よく／＼案あるべかりける事にこり。りの頃名臣もあまた有りしにや。また通憲法師よろづ申し行ひしに。なごか諫め申さざりける。大義には滅親といふことのあるは。石碯といふ人りの子を殺したることあり。父として不忠の子を殺すは理りなり。父

不忠なりとも。子として殺すといふ道理なし。孟子にたどへをとりて云へるに。舜の天子たりし時。その父瞽叟人を殺すことあらんを。時の大理なりし皋陶捕へたらば。舜はいかにしたまふべきといふに。舜は位をすて。父を負ひて去らまじとあり。大賢の教へなれば。忠孝の道あらはれて。おもしらく侍り。

保元平治よりこのかた。天下亂れて武勇盛に王位軽くなりぬ。未だ太平の世にかへらざるは。名行のやぶれうめしによれる事と見えたる。かくてしばし鎮まれりしに。主上上皇御中惡しくて。主上の外舅大納言經宗。御めの子の別當惟方等。上皇の御意に背きければ。清盛朝臣に仰せて召し捕へられ。配所に遣はさる。これより清盛天下の權をほしきまゝにして。程なく太政大臣にあがり。その子大臣の大將になり。剩へ兄弟左右の大將にて並べりき。天下の諸國は。なかば過ぐるまで官領となし。官位は多く一門家僕にふさげたり。王室の權更に無きが如くになりぬ。この天皇天下を治め給ふと七年。二十三歳おまし（き）。神皇正統記

阿新丸

作者しらす

去る程に君の御謀叛を申し勸めけるは。源中納言具行。右少辨俊基。日野の中納言資朝なり。おのゝ死罪に行はるべしと評定一途に定つて。まづ去年より佐渡の國へ流されておはする資朝卿を斬り奉るべしと。其國の守護本間山城入道に下知せらる。

此事京都に聞えければ。此資朝の子息國光の中納言。其頃は阿新殿とて歳十三にておはしけるが。父の卿囚人になり給ひしより。仁和寺邊に隠れて居られけるが。父誅せられ給ふべき由を聞きて。今は何事にか命を惜しむべき。父と共に斬られて冥途の旅の供をもし。又最期の御有様をも見奉るべしとて。母に御暇を乞はれける。

母御頻に諫めて。佐渡とやらんは。人も通はぬ怖ろしき島とこり聞ゆれ。日敷を經る道なれば何としてか下るべき。其上汝にさへ離れては。一日片時も命ながらふべしとも覺えずと。泣き悲しみて止めければ。よしや伴ひ行く人なくは。いかなる淵瀬にも身を投げて死なんと申しける間。

母いたくどめば。又目の前に愛き別れも有りぬべしと思ひわびて。力なく今まで只一人つきりひたる中間を相添へられて。遙々と佐渡の國へ下されける。路遠けれども乗るべき馬もなければ。はきも習はぬ草鞋に。菅の小笠を傾けて。露分けわくる越路の旅。思ひやるこりあはれなれ。都を出で十日餘りと申すに。越前の敦賀の津に着きにけり。これより商人船に乗りて。程なく佐渡の國へ着きにける。人してかうと云ふべき便りもなければ。自ら本間が館に至りて。中門の前に立つたりける。折節僧の有りけるが立ち出で。此内への御用にて御立ち候ふか。又如何なる御用にて候ふぞと問ひければ。阿新殿。是は日野中納言の一子にて候ふが。此頃斬られさせ給ふべしと承りて。其最期の様をも見候はんが爲に。都より遙々と尋ね下りて候と云ひもあへず。涙をはらりと流しければ。此僧心有りける人なりければ。急ぎ此由を本間にかたるに。本間も岩木ならねば。さすがあはれにや思ひけん。やがて此僧を以て持佛堂へ誘ひ入れて。旅はき脱がせ足あらはせて。疎からぬ體にて置

きたりける。

阿新殿これを楽ししと思ふにつけても。同じくは父の卿を疾く見奉らばやと云はれけれども。今日明日斬らるべき人に之を見せては。中々黄泉路の障りともなりぬべし。又關東の聞えも如何あらんぞとて。父子の對面を許さず。四五町隔てたる所に置きたれば。父の卿は之を聞きて。ゆくへも知らぬ都にいかゞ有らんと。思ひやるよりもなほ悲し。

子はそなたを見やりて。浪路遙かに隔てたりし。鄙の住居を思ひやりて。心苦しく思ひつる。涙は更に數ならず。袂の乾く隙もなし。

是こり中納言のおはします牢の内よとて見やれば。竹の一村茂りたる處に。堀ほり廻し塀塗りて。行き通ふ人も稀なり。情なの本間の心や。父は禁籠せられ子はいまだをさなし。縦ひ一所に置きたりとも。何程の怖畏か有るべきに。對面をだに許さず。まだ同じ世の中ながら。生を隔てたる如くにて。無からん後の苦の下。思ひ寐に見ん夢ならでは。逢ひ見ん事も有り難しと。互に悲しむ恩愛の。父子の道こそあはれなれ。

五月廿九日の暮程に。資朝卿を牢より出だし奉りて。遙かに御湯も召され候はぬに。御行水候へと申せば。早斬らるべき時になりけりと思ひ給ひて。嗚呼うたてしき事かな。我最期の様を見ん爲に。遙々と尋ね下りたるをさなき者を。一目も見ずして果てぬる事よとばかり宣ひて。其後は會て諸事につきて言葉をも出だし給はず。今朝までは氣色しをれて。常には涙を押し拭ひ給ひけるが。人間の事に於ては。頭燃を拂ふ如くなりぬと悟りて。たゞ綿密の工夫の外は。餘念有りとも見え給はず。夜に入れば興さしよせて乗せ奉り。こゝより十町計有る河原へ出だし奉り。輿昇き居ゑたれば。少しも臆したる氣色も無く。敷皮の上に居直りて。辭世の願を書き給ふ。

五蘊假成形 四大今歸空

將首當白刃 截斷一陣風

年號月日の下に名字を書き付けて。筆をさしおき給へば。きりて後へ廻るとぞ見えし。御首は敷皮の上に落ちて。むくろは猶塵せるが如し。

此程常に法談などし給ひける僧來りて。葬禮形の如く執り營み。空しき骨を拾うて阿新に奉りければ。阿新いまだ幼稚なれども。けなげなる所存有りければ。父の遺骨をば。只一人召使ひける中間に持たせて。先づ我より先に高野山に参りて。奥の院とかやに納めよとて。都へ歸し上せ。我身はいたはる由にて。猶本間が館に留まりける。これは本間が情なく。父を今生にて見せざりつる憐愍を散ぜんと思ふ故なり。

かくて四五日経ける程に。阿新晝は病むよしにてひねもすに臥し。夜は忍びやかに抜け出で。本間が寢所など細々に伺うて。隙有らば彼入道父子が間に。一人さし殺して腹切らんずる物をと。思ひ定めてぞねらひける。

或夜雨風烈しく吹きて。そのおする郎等共も皆遠侍に臥したりければ。今こゝろ待つ所の幸よと思ひて。本間が寢所の方を忍びて伺ふに。本間が運や強かりけん。今夜は常の寢所をかへて。いづくにありとも見えず。又二間なる所に燈の影の見えけるを。是はもし本間入道が子息にてや有

らん。うれなりとも討つて恨を散せんと。ぬけ入りて之を見るに。それさへことには無くして。中納言殿を斬り奉りし本間三郎と云ふものぞ。只一人臥したりける。

よしや是も時に取りては親の敵なり。山城入道に劣るまじと思ひて。走りかゝらんとするに。我はもとより太刀も刀も持たず。只人の太刀を我物と頼みたるに。燈ことに明かなれば。立ちよらば。やがて驚きあふ事もやあらんずらんと危ぶみて。左右なく寄りえず。いかゞせんと按じ煩うて立ちたるに。折節夏なれば。燈の影を見て蛾といふ虫のあまた明り障子に取りつきたるを。すはや究竟の事こゝあれと思ひて。障子を少し引き明けたれば。此虫あまた内へ入りて。やがて燈を打ち消しぬ。

今はかうと嬉しくて。本間三郎が枕に立ち寄りて探るに。太刀も刀も枕に有りて。主はいたく寐入りたり。先づ刀を取りて腰にさし。太刀をぬいて胸もとに指し當て。寝たる者を殺せば死人に同じければ。驚かさんと思ひて。先づ足にて枕をはたさず蹴たりける。蹴られて驚く所を。一

の太刀に臍の上を。壘までつと突きとほし。返す太刀に咽ぶえ指し切つて。心しづかにうしろの笹原の中へ隠れける。

本間三郎が一の太刀に胸を通されてあつといふ聲に。番衆共驚き騒いで。火を燭して之を見るに。血のつきたる小さき足跡あり。さては阿新殿のしわざなり。堀の水深ければ。木戸より外へはよも出でじ。捜し出だしで打ち殺せとて。手々に松明をともし。木の下草の陰まで。残る所なくが捜しける。

阿新は竹原の中に隠れながら。今は何くへか遁るべき。人手にかゝらんよりは。自害をせばやと思はれけるが。にくしと思ふ親の敵をば討ちつ。今は如何にもして。命を全うして君の御用にも立ち。父の素意をも達したらんこゝろ。忠臣孝子の義にてもあらんずれ。若しやと一まづ落ちて見ばやと。思ひ返して。堀を飛び越えんとしけるが。口二丈深さ一丈に餘りある堀なれば。越ゆべきやうも無かりけり。

さらば之を橋にして渡らんよと思ひて。堀の上に末靡きたる吳竹の梢

へさらくくと登りたれば。竹の末堀の向へ靡き伏して。やすくと堀をば越えてけり。

夜はまだ深し。湊の方へ行きて。舟に乗りてこり陸へはつかめと思ひて。たどるく浦の方へ行く程に。夜もはや次第に明け離れて。忍ぶべき道無ければ。身を隠さんとして目を暮し。麻や蓬の生ひ茂りたる中に隠れ居たれば。追手共と覺しき者共。百四五十騎馳せ散りて。もし十二三許なるちごや通りつると。道に行きあふ人ごとは。問ふ音してが過ぎ行きける。

阿新其日は麻の中にて目を暮し。夜になれば湊へと心ざして。うことも知らず行く程に。孝行の志を感じて。佛神擁護の陣をや廻らされけん。年老いたる山伏一人行きあひたり。此ちごの有様を見て。痛はしくや思ひけん。是は何處より何處をさして。御渡り候ふぞと問ひければ。阿新事の様を有りの儘に語りける。

山伏之を聞きて。我此人を助けずは。只今の程に。かはゆき目を見るべ

しと思ひければ。御心安く思召され候へ。湊に商人船多く候へば。乗せ奉りて。越後越中の方まで送りつけまわらすべしと云ひて。足たゆめば此ちごを肩にのせ。背中に負ひて。程なく湊にぞ行きつきける。(太平記)

吉野しくぬ

作者しらず

元弘三年正月十六日。二階堂出羽入道道蘊。六萬騎の勢にて。大塔宮の籠らせ給へる吉野の城へ押し寄する。菜摘河の川淀より。城の方を見上げたれば。峯には白旗赤旗錦の旗。深山嵐に吹きなびかされて。雲か花かと怪しまる。麓には數千の官軍。冑の星を輝かし鎧の袖を連ねて。錦繡を敷ける地の如し。峯高うして道細く。山嶮しうして苔滑かなり。されば幾十萬騎の勢にて攻むるとも。たやすく落すべしとは見えざりけり。同じき十八日の卯の刻より。兩陣互に矢合せして。入れ替へく攻め戦ふ。官軍は物馴れたる案内者共なれば。ここのつまりかしこの難所に走り散つて。攻め合はせ開き合はせ散々に射る。寄手は死生不知の坂東武士なれば。親子討たるれども顧みず。主従滅ぶれども物の數ともせず。

乗り越わく攻め近づく。

夜盡七日が間。息をもつかせず相戦ふに。城中の勢三百餘人討たれければ。寄手も八百餘人討たれにけり。况んや矢に當り石に打たれ。生死の際を知らざる者は。幾千萬といふ數を知らず。血は草芥を染め尸は路徑に横たはれり。されども城の體少しも弱らねば。寄手の兵多くは退屈して見たりける。

こゝに此山の案内者として。一方へ向けられたりける吉野の執行岩菊丸。己れが手の者を呼び寄せて申しけるは。東條の大將金澤右馬助殿は。既に赤坂の城を攻め落して。金剛山へ向はれたりと聞ゆ。當山の事我等案内者たるに由つて。一方を承つて向ひたる甲斐もなく。攻め落さで數日を送る事こゝ遺恨なれ。つらく事の様を按ずるに。比城を追手より攻めば。人のみ討たれて落す事有り難し。推量するに。城の後の山金峯山には。嶮しきを憑んで。敵さまで勢を置きたる事あらじと覺ゆるぞ。物馴れたらんずる足輕の兵。百五十人勝つて歩立になし。夜に紛れて金峯

山より忍び入り。愛染寶塔の上にて。夜のほのくも明けはてん時。関の聲を揚げよ。城の兵ときの聲に驚きて度を失はん時。追手搦手三方より攻め上りて。城を追ひ落し。宮を生捕り奉るべしとぞ下知しける。

さらばとて案内知りたる兵百五十人を勝つて。其日の暮程より金剛山へ廻つて。岩を傳ひ谷を登るに。按の如く山の嶮しきをたのみけるにや。只こゝかしこの梢に旗ばかりを結び付け置きて。防ぐべき兵一人もなし。百餘人の兵共思ひの儘に忍び入りて。木の下岩の陰に。弓箭を伏せ胃を枕にして。夜の明くるをぞ待ちたりける。

相圖の頃にもなりければ。追手の五萬餘騎。三方より押し寄せて攻め上る。吉野の大衆五百餘人。攻口におり合ひて防ぎ戦ふ。寄手も城の内も互に命を惜しまず。追ひ上せ追ひ下し。火花を散らしてぞ戦うたる。斯かる所に金峯山より廻りたる搦手の兵百五十人。愛染寶塔よりおり下つて。在々所々に火を懸けて。関の聲をぞ揚げたりける。

吉野の大衆前後の敵を防ぎ兼ねて。或は自ら腹を掻き切つて。猛火の中

へ走り入つて死ぬるも有り。或は向ふ敵に引組んで。刺し違へて共に死ぬるもあり。思ひ／＼に討死をしける程に。追手の堀一重は死人に埋まりて平地になる。

去る程に搦手の兵。思ひもよらぬ勝手の明神の前より押し寄せて。宮の御座ありける藏王堂へ打つてかゝりける間。大塔宮今は遁れぬ所なりと思召し切つて。赤地の錦の鎧直垂に。緋威の鎧のまだ巳の刻なるを透間もなく召され。龍頭の冑の緒をしめ。三尺五寸の小長刀を脇に挟み。劣らぬ兵廿餘人前後左右に立て。敵の心らがつて扣へたる中へ走りかゝり。東西を拂ひ南北へ追ひ廻し。黒煙を立てて切つて廻らせ給ふに。寄手大勢なりといへども。催の小勢に切り立てられ。木の葉の風に散るが如く。四方の谷へ颯と引く。

敵引けば宮は。藏王堂の大庭に並み居させ給ひて。大幕打ち揚げて最後の御酒宴有り。宮の御鎧に立つ所の矢七筋。御頬先二の御腕二箇所突かれさせ給ひて。血の流るゝ事流の如し。

然れども立つたる矢をも抜かず。流るゝ血をも拭ひ給はず。敷皮の上立ちながら。大盃を三度傾けさせ給へば。小寺相摸四尺三寸の太刀の切先に敵の首を刺し貫きて。宮の御前に畏まり。戈鋌劍戟を降らす事電光の如くなり。磐石岩を飛ばす事春の雨に相同じ。然りとはいへども天帝の身には近づかぬ。修羅かれが爲に破らるゝと。はやしを揚げて舞うたる有様は。漢楚の鴻門に會せし時。楚の項伯と項莊とが。劍を抜いて舞ひしに。樊噲庭に立ちながら。帷幕をかゝけて項王を睨みし勢も。斯くやと覺ゆるばかりなり。

追手の合戦急なりと覺えて。敵味方の鬨の聲。相交はりて聞えけるが。實にも其戦に。自ら相當る事多かりけると見えて。村上彦四郎義光。鎧に立つ所の矢十六筋。枯野に残る冬草の。風に臥したる如くに打ち懸けて。宮の御前に参りて申しけるは。追手の一の木戸。いふかひなく攻め破られつる間。二の木戸に支へて數刻相戦ひ候所に。御所中の御酒宴の聲冷ましく聞え候ひつるに付いて参りて候。敵已にかさに取り上げて味

方の氣の勞れ候ひぬれば。此城にて功を立てん事今は叶はじと覺え候。未だ敵の勢をよりへ廻らし候はぬ先に。一方より打ち破つて一先落ちて御覽有るべしと存じ候。但し跡に残り留まりて戦ふ兵無くは。御所の落ちさせ給ふ者なりと心得て。敵何くまでも續いて追駈けまわらせんと覺え候へば。恐ある事にて候へども。召されて候錦の御鎧直垂と。御物の具とを下し賜はりて。御諱の字を犯して敵を欺き。御命に代りまわらせんと申しければ。宮いかでか去る事有るべき。死なば一所にてこり兎も角もならめと仰せられけるを。義光言葉を荒らかにして。斯かるあさましき御事や候。漢の高祖滎陽に圍まれし時。紀信高祖の眞似をして。楚を欺かんと乞ひしをば。高祖これを許し給ひ候はずや。是程にいひがひなき御所存にて。天下の大事を思召し立ちける事こりうたてけれ。はや其御物の具を脱がせ給ひ候へと申して。御鎧の上帯を解き奉れば。宮げにもとや思召しけん。御物の具鎧直垂まで脱ぎ替へさせ給ひて。我若し生きたらば汝が後生を出ふべし。共に敵の手にかゝらば。冥途までも同

じ衛に作ふべしと仰せられて。御涙を流させ給ひながらも。勝手の明神の御前を。南へ向ひて落ちさせ給へば。義光は二の木戸の高櫓に上り。遙に見送り奉りて。宮の御後影の幽かに隔たらせ給ひぬるを見て。今はかうと思ひければ。櫓の小間の板を切り落して。身をあらはにして大音聲を揚げて名乗りけるは。天照大神の御子孫。神武天皇より九十五代の帝。後醍醐天皇第二の皇子。一品兵部卿親王尊仁。逆臣の爲に亡ぼされ。恨を泉下に報せん爲に。只今自害する有様見置きて。汝等が武運忽ちに盡きて。腹を切らんずる時の手本にせよといふまゝに。鎧を脱ぎて櫓より下へ投げ落し。錦の鎧直垂の袴ばかりに。練貫の二重小袖を押し肌脱いで。白く清げなる膚に刀を突き立て。左の脇より右の側腹まで一文字に掻き切つて。脇つかんで櫓の板に投げつけ。太刀を口にくはへて。うつぶしになつてぞ臥したりける。

追手搦手の寄手これを見て。すはや大塔宮の御自害有るは。我先に御首を賜はらんとて。四方の圍を解いて一所に集まる。其間に宮は引き違へ

て。天の川へ落させ給ひける。(太平記)

物草太郎

作者しらす

東山道みちのくの末。信濃の國十郡のうの内に。つるまの郡あたらしの郷といふ所に。ふしぎの男一人侍りけり。其名を物草太郎ひちかすと申し候。名を物ぐさ太郎と申す事は。國にならびなきほどの物ぐさしなり。たゞし名こり物ぐさ太郎と申せども。家づくりのありさま。人にすぐれてめでたく侍りける。四面四町に築地をつき。三方門を立て。東西南北に池を堀り。島をつき松杉をうる。島より陸地へ反橋をかけ。高欄にぎぼうしをみがき。まことに結構世にこねたり。十二間の遠侍。九間のわたり廊下。つり殿。ほり殿。梅壺。桐壺。まがきが壺にいたるまで。百種の花をうる。しゆでん十二間につくり。ひはだぶきに葺かせ。錦をもつて天井をはり。桁うつぱり垂木の組入には。まろがねこがねを金物に打ち。瓔珞のみすをかけ。馬屋さぶらひ所にいたるまで。ゆしくつくり立て居ばやこ。心にはおもへども。いろく事足らねば。たゞ竹

を四本たて。薦をかけてすぬたりける。雨のふるにも日のてるにも。ならはぬすまひしてぬたり。

かやうにつくりわろしとは申せども。足がねのあかざり。蚤虱ひぢの苦にいたるまで。足らはずといふことなし。もとでなければ商ひせず。物をつくらねば食物なし。四五日の内にも起きあがらず。ふせりぬたりけり。

ある時なさけある人のもとより。あいきやうの餅を五つ。いかにひだるかるらんとて得させければ。たまさかに待ちえたる事なれば。四つをば一度に食ひ侍り。今ひとつを心に思ひけるやうは。ありと思ひて食はねば。後のたのみあり。なしと思へばひだるくなけれども頼みなし。まぼらひてあるも頼みなり。いつまでも人の物を得させんまでは。持たばやと思ひて。寐ながら胸の上にて遊ばかして。鼻油を引きて。口にぬらし。かうべにいたゞき。とりあうぶほどにとりすべらかし。大道までぶころびける。

うの時物ぐさ太郎みわたして思ふやう。とりゆき歸らんも物ぐさじ。いつの頃にも。人のとほらぬ事はあらじと。竹の竿を捧げて。犬鳥のよるを逐ひのけて。三日までまつに人見えず。三日と申すにたゞの人にはあらず。その所の地頭あたらしの左衛門の尉のぶよりといふ人。小鷹狩まじろの鷹をすゑさせて。其勢五六十騎にてとほり給ふ。物ぐさ太郎これを見て。鎌首もちあげて。のう申し候はん。うれに餅の候。取りてたび候へと申しけれども。耳にも聞き入れず打ちとほりけり。物ぐさ太郎これを見て。世間にあれほど物ぐさき人の。いかにして所知所領を煮るらん。あの餅を馬よりおりて。とりて傳へん程の事は。いとやすき事。世の中に物ぐさきもの。我ひとりと思へば。多くありけるよと。あらうたての殿やとて。斜ならずつぶやき。腹をぞ立てにける。兵衛尉あらしき人ならば。腹をも立て。いか様にもあたり給ふべきに。馬をひかへてこれを開き。きやつめが事が。聞ゆるものぐさ太郎といふものか。さん候。ふたりとも候はとこそ。是が事にて候。さてあのれはら

かやうにしてすぐるぞ。さん候。人の物をくれ候時は。何をもちぶる。くれ候はぬ時は。四五日も十日ばかりもたゞむなく過ぎ候と申しければ。さてはふびんの次第かな。命たすかるしたくをせよ。一樹の陰にやどることも。一河のながれを汲むことも。他生の縁となり。所こらおほきに。わが所領の内に生れあふこと。前世の宿縁なり。地をつくりてすぎよとありければ。もち候はぬと申す。さらばとらせんとあり。物ぐさく候ふ程に。地もほしからず候と申せば。商をしてすぎよとあれば。もとで候はずと申す。とらせんとありければ。今更ならはぬこと。しらぬ事。なりたがく候と申せば。さてはかゝるくせものかな。いでさらばたずかるやうにせんとして。硯をとりよせて札をかきて。わが領内をまはす。此物ぐさ太郎に。毎日三合飯を二度くはせ。酒を一度のますべし。さなからんものは。わが領内には叶ふべからず。と觸れられけり。まことにく。これぞ合はぬは君のおほせかなとは思へども。かくのごとくあるほどに。三年が養ひける。(御伽草子)

一寸法師

作者しらす

中頃の事なるに。津の國難波の里に。おうちと姥と侍り。うば四十に及ぶまで。子のなきことを悲しみ。住吉にまわり。なき子を祈り申すに。大明神はれとおぼしめして。四十一と申すに。たゞならずなりぬれば。をうち喜び限りなし。やがて十月と申すに。いつくしきをのこをまうけたり。

さりながら生れおちて後。せい一寸ありければ。やがて其名を一寸ぼうしと名づけられたり。年月をふるほどに。はや十二三になるまでうだてぬれども。せいも人ならず。つくぐと思ひけるは。たゞものにてはあらず。たゞばけ物ふせいにてこり候へ。われいかなる罪のむくいにて。かやうのものをば。住吉より賜はりたるや。あさましきよと。見るめもふびんなり。

夫婦思ひけるやうは。あの一寸法師めを。いつかたへもやらばやと思ひけると申せば。やがて一寸法師。此よし承り。親にもかやうに思はるゝも。くちをしき次第かな。いつ方へもゆかばやと思ひ。刀なくてはいかごと思ひ。針を一つ姥に乞ひ給へば。とりいだしたびにける。すなはち麥藁にてつかさやをこしらへ。都へのぼらばやと思ひしが。しぜん舟なくてはいかがあるべきとて。又姥にときと箸とたへと申しうけ。なごりをしくとむれども。たち出でにけり。住吉の浦よりごきを舟としてうち乗りて。都へぐのぼりける。

すみなれし 難波のうらを 立ちいで

都へいうぐ わがこころかな

かくて鳥羽の津にもつきしかば。そこもとにのり捨てて都にのぼり。こゝやかしこと見るほどに。四條五條の有様。心も詞にもおよばれず。さて三條の宰相殿と申す人のもとにたちよりて。物申さんといひければ。宰相殿は聞しめし。おもしろき聲と聞き。椽のはなへたち出で。御覽ずれども人もなし。一寸法師かくて人にもふみ殺されんとて。ありつる下駄の下にて。物申

さんと申せば。宰相殿ふしぎのことかな。人は見えずして。おもしろき聲にて呼ばくる。出でく見ばやとおぼしめし。うこなる足駄はかんとめされければ。あしだの下より。人を踏ませ給ひうと申す。ふしぎにれもひみれば。いつきやうなるものにて有りけり。宰相殿御覽じて。げにもれもしろきものなりとて。御わらひなされけり。(下略)御伽草子)

第五十八章 韻文の作例

其一 謠曲

松風

作者しらす

ワキ詞 是は諸國一見の僧にて候。我未だ西國を見ず候ふ程に。此度思ひ立ち西國行脚と心ざして候。あらうれしや急ぎ候ふ程に。是ははや津の國須磨の浦とかや申し候。又是なる磯邊を見れば。様ありげなる松の候。如何さま謂れのなき事は候ふはじ。此あたりの人に尋ねばやと思ひ候。扱は此松は。いにしへ松風村雨とて。二人の海士の舊跡かや。痛はしや

其身は土中に埋もれぬれども。名は残る世のしるしとて。變はらぬ色の松一木。緑の秋を残す事のあはれさよ。

かやうに經念佛してとむらひ候へば。實に秋の日のならひとて程なう暮れて候。あの山本の里までは程遠く候ふ程に。是なる海士の鹽屋に立ち寄り。一夜を明かさばやと思ひ候。

シテツレ一聲「汐汲車わづかなる。浮世に廻るはかなさよ。

ツレ「波こゝもとや須磨の浦。

二人「月さへぬらす袂かな。

シテサシ「心づくしの秋風に。海は少し遠けれども。彼行平の中納言。

二人「關吹き越ゆると詠め給ふ。浦回の波のよるくは。實に音近き海士の家。里離れなる通路の。月より外は友もなし。

シテ「實にや浮世の業ながら。殊に拙き海士小舟の。

二人「渡りかねたる夢の世に。住むとやいはんうたかたの。汐汲車よるべなき。身は海士人の袖ともに。思ひを乾さぬ心かな。

地「かくばかり経がたく見ゆる世の中に。羨ましくも澄む月の。出沙をいざや汲まうよ。影はづかしき我姿。忍び車を引く沙の。跡に残れる溜水。いつまで澄みははつべき。野中の草の露ならば。日影に消えも失すべきに。是は磯邊に寄藻かく。海士の捨草いたづらに。朽ち増さり行く秋かな。

シテサシ「ねもしろや馴れても須磨の夕ま暮。海士の呼聲かすかにて。

二人沖に小さき漁舟の。影幽かなる月の顔。かりの姿や友千鳥。野分沙風いづれも實に。かゝる所の秋なりけり。あら心すこの夜すがらやな。

シテ「いざ／＼沙を汲まんとして。汀に満干の沙衣の。

ツレ「袖を結んで肩に掛け。

シテ「沙汲む爲めとは思へども。

ツレ「よしうれとても。

シテ「女車。

地「寄せては歸るかたをなみ。蘆邊の田鶴こりは立ちさわげ。四方の風も

音添へて。夜寒なにと過さん。更け行く月こそさやかなれ。汲むは影なれや。焼く鹽煙心せよ。さのみなど海士人の。憂き秋のみを過ごさん。

松島や小島の海士の月にだに。影を汲むこり心あれ。

ロンギ地「運ぶは遠き陸奥の。其名や千賀の鹽竈。

シテ「賤が鹽木を運びしは。阿漕が浦に引く沙。

地「其伊勢の海の二見の浦。二度世にも出でばや。

シテ「松の村立かすむ日に。沙路や遠く鳴海瀉。

地「うれは鳴海瀉。こは鳴尾の松影に。月こりさはれ蘆の屋。

シテ「灘の沙汲む憂き身ぞと。人にや誰も黄楊の櫛。

地「さしくる沙を汲み分けて。見れば月こり桶にあれ。

シテ「是にも月の入りたるや。

地「うれしや是も月あり。

シテ「月は一つ。

地「影は二つ満つ沙の。夜の車に月を載せて。憂しともれもはぬ沙路かな

ツキ「鹽屋のあるじの歸りて候ふ。宿を借らばやと思ひ候。如何に是なる鹽屋の内へ案内申し候。

ツレ「誰にて渡り候ふぞ。

ツキ「是は諸國一見の僧にて候。一夜の宿を御借し候へ。

ツレ「暫く御待ち候へ。あるじに其由申し候ふべし。如何に申し候。旅人の御入り候ふが。一夜の御宿と仰せ候。

ツレ「餘りに見苦しき鹽屋にて候ふ程に。御宿は叶ふまじきと申し候へ。

ツレ「あるじに其由申し候へば。鹽屋の内見苦しく候ふ程に。御宿は叶ふまじき由仰せ候。

ツキ「いや／＼見苦しきは苦しからず候。出家の事にて候へば。平に一夜を明かさせて賜はり候へと重ねて御申し候へ。

ツレ「いや叶ひ候まじ。

ツレ「暫く。月の夜影に見奉れば世を捨人。よし／＼かゝる海士の家。松

の木柱に竹の垣。夜寒さこゝと思へども。爐火にあたりて。御泊りあれと申し候へ。

ツレ「此方へ御入り候へ。

ツキ「あらうれしやさらばかう参らうずるにて候。

ツレ「始めより御宿参らせたくは候ひつれども。餘りに見苦しう候ふ程に。さて否と申し候。

ツキ「御志あり難う候。出家と申し旅といひ。とまりはつべき身ならねば。何處を宿と定むべき。其上此須磨の浦に心あらん人は。わざともわびて

こゝに住むべけれ。わくらははに問ふ人あらば須磨の浦に。藻鹽たれつゝわぶと答へよと。行平も詠じ給ひしとなり。又あの磯邊に一木の松の候ふ

を。人に尋ねて候へば。松風村雨二人の海士の舊跡とかや申し候ふ程に。逆縁ながらとむらひてこゝ通り候ひつれ。あら不思議や。松風村雨の事を

申して候へば。二人共に御愁傷候ふ。是は何と申したる事にて候ふぞ。

ツレ「實にや思ひ内にあれば。色外に顯はれさむらふぞや。わくらは

シテツレ「實にや思ひ内にあれば。色外に顯はれさむらふぞや。わくらは

に問ふ人あらばの御物語。餘りになつかしう候ひて。猶執心の闇浮の涙。再び袖をしぼりさむらふ。

ワキ 猶執心の闇浮の涙とは。今は此世に亡き人の詞なり。又わくらはの歌もなつかしいなど承り候。かたぐ不審に候へば。二人共に名を御名のり候へ。

二人 恥づかしや申さんとすればわくらはに。事問ふ人もなき跡の。世にしほじみてこりずまの。恨めしかりける心かな。此上は何をかさのみ包もべき。是は過ぎつる夕暮に。あの松陰の苔の下。亡き跡とはれ参らせつる。松風村雨二人の女の。幽霊是まで来りたり。扱も行平三年が程。御つれづれの御船遊び。月に心は須磨の浦。夜汐を運ぶ海士少女に。れとどひ撰ばれ参らせつ。折にふれたる名なれやとて。松風村雨と召されしより。月にも馴るゝ須磨の海士の。

シテ 鹽焼衣色替へて。

二人 かどりの衣の空だきなり。

シテ かくて三年も過ぎ行けば。行平都に上り給ひ。

ツレ 幾程なくて世を早う。去り給ひぬと聞きしより。

シテ あら戀しやさるにても。又いつの世の音信を。

地 松風も村雨も。袖のみぬれてよしなやな。身にも及ばぬ戀をさへ。須磨の餘りに罪深し。跡とむらひて給ひ給へ。

地 戀草の。露も思ひも亂れつ。心狂氣に馴衣の。巳の日の祓や木綿四手の。神の助けも波の上。あはれに消えし憂き身なり。

クセ あはれいにしへを。思ひ出づればなつかしや。行平の中納言。三年はこゝに須磨の浦。都へ上り給ひしが。此程の形見とて。御立烏帽子狩衣を。残し置き給へども。之を見る度に。いやましの思ひ草。葉末に結ぶ露の間も。忘るゝひまも有りなんと。よみしも理りや。なほ思ひこりは深けれ。

シテ 宵々に。ぬぎて我寝る狩衣。

地 かけて頼む同じ世に。住むかひあらばこり。忘れ形見もよまなしと。

捨てよも置かれず。取れば面影に立ち増さり。起臥わかで枕より。跡より戀の攻め來れば。せんかた涙に。伏し沈む事ぞ悲しき。

シテ「三瀬河。絶えぬ涙の憂き瀬にも。亂るゝ戀の淵はありけり。あらうれしやあれに行平の御立ち有るが。松風と召されさむらふがやいで參らう。

ツレ「あさましや其御心故にこり。執心の罪にも沈み給へ。娑婆にての妄執を。なほ忘れ給はぬがや。あれは松にてこり候へ。行平は御入りもさむらはぬ物を。

シテ「うたての人のいひごとや。あの松ころは行平よ。たとひ暫しは別るゝとも。松とし聞かば歸りこんど。連ね給ひし言の葉は如何に。

ツレ「實にのう忘れてさむらふがや。たとひ暫しは別るゝとも。待たば來んどの言の葉を。

シテ「こなたは忘れず松風の。立ち歸りこん御音信。
ツレ「終にも聞かば村雨の。袖しばまこりぬるゝとも。

シテ「待つにかはらで歸りこば。

地「あら頼もしの

シテ「御歌や。

地「立ち別れ。

シテ「いなばの山の峰に生ふる。まつとし聞かば今かへりこん。うれはいなばの遠山松。

地「これはなつかし君こゝに。須磨の浦回の松の行平。立ち歸りこば我も木陰に。いざ立ち寄りて磯馴松の。なつかしや。

地「松に吹き來る風も狂じて。須磨の高波はげしき夜すがら。妄執の夢に見々ゆるなり。我跡とひてたび給へ。暇申して歸る波の音の。須磨の浦かけて。吹くやうしろの山おろし。關路の鳥も聲々に。夢も跡なく夜も明けて。村雨と聞きしも今朝見れば。松風ばかりや残るらん。

攝待

作者しらす

次第「旅の衣は篠懸の。露けき袖や志をるらん。

歌「子にふし寅に起きなれて。雲井の月をみねの雪。うの松島にまぬらんと。東路さしていうぎけり。」

ワキ「調「いかに申し候。まづ此所に御休みあらうするにて候。」

兼房「是に高札の立つて候ふ御覽候へ。」

ワキ「承り候。何々佐藤の館において。山伏攝待と候。やがて御つき候へ。」

兼房「佐藤の館にわいて山伏攝待の事は。我らが望む所なれども。佐藤の

たちが憚にて候ふほどに。御とほりあれかしと存じ候。」

ワキ「是は仰にて候へども。只去らぬ様にて御つきあらうするにて候。」

子「いかに誰かある。」

トモ「御前に候。」

子「山伏達はいくたり御つきあるぞ。」

トモ「十二人御つきにて候。」

子「先々出でし對面申し候ふべし。」

ワキ「是なるをさなき人はたが御子息にて御入り候ふぞ。」

子「是は佐藤繼信が子にて候。」

ワキ「扱繼信殿は御内に御座候ふか。」

子「判官殿の御供申し。八島の合戦に討たれて候。」

ワキ「扱此攝待は如何なる人の御企にて候ふぞ。」

子「判官殿十二人の山伏と爲り。奥へ御下りのよし承り候ふ程に。祖母に

て候ふ者此せつたいをはじめて候。見申せばかた／＼こり十二人御入り

候へ。もし判官殿にてはなく候ふか。」

ワキ「暫く候。かゝる粗忽なることを承るものかな。先々御内へ御入り候

へ。」

シテ「いかに鶴若。」

子「何事にて候ふぞ。」

シテ「山伏達はいくたり御つき有るぞ。」

子「十二人御つき候。」

シテ「かしましく。舊里を出でし鶴の子の。松にかへらぬさびしさよ。」

げにや憚ある身として。御前に参りてさむらへば。かつうは亡き人の名をもくたし。又は子共の古への耻をも。あらはすにては候へども。餘りに御なつかしき心ばかりにて。御前に参りて候ふなり。是は故佐藤庄司が後家。織信忠信が母にて候。げにや親子恩愛のわかれのあまりには。つゝむべき人めをも去らず。またはうき身の恥をも。あらはずにては候へどもさりながら。此攝待と申すに。現世の祈りの爲めにもあらず。後生善所とも、ねもはず。嫡子織信は八島にて討たれ。おとうと忠信は都にて尖せけるとばかりにて。委しき事をも去らずして。獨かなしむ身を去る雨の。晴れぬころやなぐさむと。此攝待をはじめて候。札を立てよりこのかた。一日に五人三人。ないし一人ふたり。絶ゆる事はまじまされども。十二人は是が始にて候。いづれか我君ぞ。何れかうにてまします。夜もふけたり。人の来るべき事にもあらず。この姥が耳にうと御をしへ候はど。この攝待の利生にて。地空しくなりし織信を。ふたゝび見ると思ふべし。親子よりも主従は。

ふかき契りの中なれば。さこり我君も。あはれと思召すらめ。殊さら御ために。命を捨てし郎等の。ひとり母ひとり子なり。などやとむらひの。御言葉をも出だされぬ。かほど數ならぬ。身には思ひのなかれかし。あらうらめしのうき世や。

ワキ詞 是は思ひもよらぬ事を承り候ふ物かな。我等ごときの山伏の。五人三人行きつれく通り候ふが。今夜此攝待に十二人つきたればとて。判官殿とはかゝる粗忽なる事を承り候ふものかな去りながら。織信忠信の母にてまします。判官殿の御内の人の名字をば御存じ候ふべし。うなたより名をさして承り候へ。

シテ詞 仰のごとく我子は御内に有りし者なれば。大方は推量申すとも。さのみよもちがひ候はじ。

兼房 かやうに物申す山伏をば。どこ山伏と御覽じて候ふぞ。

シテまづ唯今物仰せられつる客僧は。此御供の中にては一の老體にて御入り候ふな。いで此御供の中に年よりたる人はたう。や。今思ひ出だし

たり。判官殿の御乳母。増尾の十郎權の頭。兼房山伏にてましますな。兼房年寄りけるが兼房ならば。尼公も兼房にて候ふべきか。シテ「あられしからずの仰や候。なふく」是なる山伏は。どこ山伏にて御入り候ふぞ。

鷲尾「是は出羽の羽黒山より出でたる客僧にて候。

シテ「いや是は播磨の人の聲にて候。それをいかにと申すに。此姥はもと播磨の者。十三の年繼母をうらみ都に上り。故庄司殿と契り。繼信忠信をまうけ。とかくうきめを見候へば。唯うらめしうこり候へ。されば我國の聲なれば。などかはまらで候ふべき。いで此御供の中に播磨の人はたう。是も思ひ出だして候。判官殿ひよどり越とやらんをとほり給ひしとき。狩人の姿にて参りあひ。其まゝ名字給り。今までも御供と聞えし。鷲尾の十郎山伏にて御渡り候ふか。

ソキ「扱かう申山伏をば。どこ山伏としろしめされて候ふぞ。

シテ「此御聲こり大事にて候へ。京の人の聲かとおもへば。また近江の人

の聲にも似たり。いで此御うちにあふみの人はたう。げに是も思ひ出だしたり。はじめより器量こつがら人に勝れ。もの仰せられ候ふも何とやらん物々しく見え給ひて候。あつばれ是は辨慶山伏とさめれ。うれならば本は近江の人。三塔一の悪僧。今は又わが君の。一人當千の武士よのう。

地「ものゝふも。物のあはれは是る物を。などされば餘りに。御心づよくましますと。袂にすがり諸共に。人目もまらず泣き居たり。

子「如何に姥とぞ。かほど心もなき人々に。さのみ言葉をかはし給はんより。今は御内へ御入り候へ。

義經「是なるわらんべはござかしき事を申す物哉。まこと繼信が子ならば。主君判官とおぼしき者をえつて出だし候へ。

子「うけたまはりて候ふとぞ。十二人の山伏の。皆御顔を見わたして。是こそゝにておはしませ。

義經「扱そにて有るべき訓れはいかに。

子「いやいかにつゝませ給ふとも。人にかはれる御装ひ。うたがひもなきわが君よ。」

地「父たべのうとて走りよれば。岩木をむすばぬ義經なれば。なくく膝に抱きとる。げにや梅檀は。二葉よりこりにほふなれ。誠に繼信が子なりけりと。よりの見るめまで。みな涙を流しける。」

ワキ「此上は何をか隠し申すべき。我君にて御座候。いりいで御座を直され候へ。近う御参りあつて御目に懸り申され候へ。」

シテ「詞」我君を拜みまぬらするにつけて。子共の事こゝ思ひ出でられて候へ。いかに申上候。繼信八島にての最後の有様。剛なりとも申し。又不覺なりとも申す。何れが誠に候ふやらん承りたく候。

義經「如何に辨慶。」

ワキ「御前に候。」

義經「繼信が八島にての最後のしご。くはしく語つて尼公に聞かせ候へ。ワキ「畏つて候。御説と申し御所望といひ。よもすがら語つて聞かせ申し

候ふべし。御前近う御参り候へ。扱も八島の合戦。今はかうよと見せしに。門脇殿の二男能登守教經と名乗つて。小舟に取り乗り磯間遠く漕ぎよせ。いかに源氏の大將源九郎義經に。矢一筋参らせん。受けて見給へとのゝしる。かう申す各を始として。みな御矢おもてに立たんとせしが。何とやらん心ねくれたりし處に。繼信は心増りの剛の人にて。ね馬の先にかけ塞がつて。義經是れに有りやとて。にっここと笑ひてひかへ給ふ。扱其時に教經は。引きまうけたる弓なれば。矢坪をさしてひやうとはなつ。あやまたず繼信が着たりける。鎧の胄板おしつけ上卷。かけずたまらずつゝと射通し。後にひかへ給ふ我君の。御きせながの草摺にはつたと射とむ。扱其時に繼信は。馬の上にて乗り直らん乗り直らんとせしかども。大事の手なればこらへずして。馬より下にどうと落つ。やがて我君ね馬をよせ。繼信を陣のうしろにかゝせ。いかに繼信。いかにくとのたまへども。たんだよわりによわつて遂に空しくなる。なんぼり面目もなき物語にて候。

シテ「扱其時に弟の忠信は候はざりけるか。

ワキ「あらおろかや忠信は。目の下において隠れましまさず。能登殿の童
菊王丸。織信が首を目懸け。潜の方に走り渡るを。忠信引いて放つ矢に。
菊王が真中射通されかつばとまろへば。教経舟より飛んでねり。菊王が
わだ髪つかんで。遙の舟に投げ入れ給へば。程なく舟にて空しくなる。
眼前兄の敵をば。弟の忠信こそ打つて候へ。

シテ「扱は敵も大將に。つかへ申しと御わらは。

ワキ「織信は又わが君の。秘藏にねぼせし御内の人。

シテ「かれは平家の舟の内。

ワキ「此方は源氏の陸の陣。

シテ「かれも主従。

ワキ「是も主従。

シテ「思ひは同じ思ひなれば。

ワキ「よりの歎を思ひ合せて。御慰も候へとよ。

シテ「うれば仰までもさむちはず。御身がはりに立ち参らする上は。今世
後世の面目なり。去りながら命ながらへ御供申し。御笈をも肩にかけ。
此御座敷に有るならば十二人の山伏の。十三人もつらなりて。只今みる
と思はぬ。いかゞは。うれしかるべき。

地「其時義経老尼に語り給ふやう。八島にて織信。今はかうよと見えし時。
思ふ事あらば委しくいひおけと。くれぐれ尋ねとひし時。織信其時に。
息のしたより申す様。弓矢とる身の。御身替りにたつ事。二世のねがひ
や三世の。御恩を少し報謝する。命のかるき身は。露塵何か惜しからん。
去りながら故郷に。八十に及ぶ母と。十に餘るわらんべ。是等が事の不
便さぞ。少し心にかゝる雲の。月におほひて。光も闇くなるごとく。其
まゝくれくと。遂に空しくなりにけり。

地「みづから手をくだき。忠勤誠壘らずは。つひに治まる世に出で。織
信忠信が。子孫を尋ね出だして。命の恩を報せんと。思ひし事も空しく。

我さへかゝる姿にて。其名をだにも名のりぬ。うき身の果が悲しき。
 シテ母は思ひに堪へかねて。更くるも知らず有明の。月の盃取り出だし。
 御酌にこり参りけれ。

義經げにや心を汲みて知る。人の情の盃を。涙と共に受けて持つ。

子鶴若酌に立ちかはり。別れし父の御前にて。給仕すると思ひなして。

地十二人の山伏の。終夜の酌を取りまはり。座敷にもなほらで。進み勇
 める有様を。父に見せばやとぞ思ふ。

去る程に夜もほのくくと明ゆけば。暇申してさらばとて。はや此宿を立
 ち出づる。

子如何に菊王馬に鞍おき。弓うつば参らせよ。君の御供申さうずるに。

シテ詞そも御供とは何事ぞ。

子君の御供申してこり。親の敵にもあふへけれ。

シテうれは弓矢の御事なり。是は修行の山伏道に。何の敵の有るべきぞ。
 子さあらば思ひ出だしたり。ちひさき兜巾篠懸を。とく拵へてたび給へ。

山伏道の御供せん。

ソキ詞辨慶なみだをおさへつゝ。いかに申さん鶴若殿。まこと御供あり

たくは。けふは道具をこしらへ給へ。明日はむかひにまぬるべし。

子まことさうか。

ソキ中々に。

ソレ我も迎ひにまぬるべし。

ソキ我もむかひにまぬらんぞ。

地面々聲々にすかさされて。いとけなき身の悲しさは。誠ぞと心得て。す

こし言葉のよわりたる。折を得て客僧は。なくく宿を出でければ。

シテ老尼はつるわかを抱き入れ。

地ゆくはなぐさむかたもあり。とまるやなみだなるらん。

其二 短歌

題しらず

藤原爲兼

沈みはつる 入日のきはに あらはれぬ

かすめる山の なほ奥の峯

夕花を

永福門院

花のうへに 志ぼしうつろふ 夕づく日

入るともなしに 影きねにけり

花の歌の中に

藤原爲實

散る花は うき草ながら かたよりて

池のみさびに かはづ鳴くなり

百首歌奉りし時

藤原公泰

暮れかゝる うともの小田の むらさめに

すゞしきうへて とる早苗かな

遠村秋夕といふ事を

藤原隆祐

夕日さす 遠山本の 里みわて

薄吹きしく 野への秋風

秋の歌の中に

藤原爲兼

あはれさも うの色となき 夕暮の

尾花が末に 秋ぞうかへる

題しらず

藤原爲基

鶯のぬる あたりの草は うら枯れて

野澤の水も 秋ぞさびしき

百首歌奉りし時

宣光門院新右衛門督

もろくなる 柳の下葉 かつちりて

秋物さむき ゆふぐれの雨

題しらず

昭訓門院權大納言

一志きり 嵐は過ぎて 桐の葉の

志づかにおつる 夕ぐれの庭

霞を

藤原爲相女

空さむみ 雪げもよほす 山風の

雲のゆきくに 霞ちるなり

松雪を

山あろし 梢の雪を 吹くたびに

一くもりする 松の下陰

藤原爲兼

題しらず

暮れぬとて ながめすつべき 名残かは

かすめる末の 春の山のは

同 心 人

雑の歌の中に

空きよく 有明の月は 影すみて

儀子内親王

木高き杉に ましら鳴くなり

千首歌よみ侍りけるに

藤原爲家

あか棚の 花の枯葉も うちしめり

朝霧ふかし 峯の山寺

(以上十四首風雅和歌集)

述懐の歌の中に

藤原信良

水葦の 岡へのささの 一ふしを

此世に残す 言のはもがな

題しらず

大江頼重

なき人の うはの空なる 形見かな

煙となりし 夕暮の雲 (以上二首新千載和歌集)

澤邊早苗といふ事を

藤原氏久

おしなべて 茂る野澤の 夏草に

まめ引き分けて さなへとるなり

伏見院に月十五首歌奉りける時

藤原爲道

吹きはらふ あらしのまゝに あらはれて

木の間さためぬ 月の影かな

松上雪を

源頼貞

水鳥の かもの神山 さねくれて

松の青葉も 雪ふりにけり

朝旅行といふ事を

頓阿法師

あふ坂の 鳥の音とほく 成りにけり

あさ露分くる あはづのゝ原

題しらず

平行氏

うき枕 結びもはてぬ 夢路より

やがてうつゝに かへる波かな

此集承りてにらびはじめける日。題をさぐりて歌よみ侍りしに。深夜月を

藤原爲明

いたづらに 我よ更けぬと なげきつる

こゝろもはれて 月をみるかな

冬の歌の中に

大江忠廣

冬枯の まのゝ荒原 ほに出でし

面影みせて ねける霜かな

(以上七首新拾遺和歌集)

待時鳥の心を

藤原經繼

待ちわぶる 心にまけよ ほととぎす

志のぶならひの 初音なりとも

嘉元百首歌奉りける時

藤原爲世

夕立の かつくはるゝ 雲間より

雨をわけても さす日影かな

久保三年百首歌たてまつりける時

藤原爲定

咲きてこり 野中の水に うつりけれ

古枝の萩の もとの心は

文保百首歌に

藤原俊光

夢さむる ひだの庵の 明がたに

鹿のねさむく 秋風が吹く

藤原爲世

曉月の心をよめる

西になる 影は木の間に あらはれて

松の葉みゆる 有明の月

頓阿法師

題しらず

里人は 衣うつなり 志がらきの

外山の秋や 夜さむなるらん

藤原實遠

百首歌奉りし時氷

落漣つ くだくる波は 岩こえて

ゆくせにこほる 山河の水

法印實性

題しらず

咲きやらで またれし程の 日敷より

さかりすくなき 山櫻かな

法印慶運

雲雀をよめる

庵結ぶ 山のすうのゝ 夕雲雀

あがるも落つる 聲かどぎきく

源秀法師

題しらず

うづもるゝ 風や下より はらふらん

積ればねつる 松のしら雪

(以上十首新後拾遺和歌集)

貞和二年百首歌たてまつりけるに

藤原爲明

春きても 梅の立枝は 風さねて

花まちどほに 鶯がなく

文保三年百首歌たてまつりける時

前権僧正雲雅

春もはや 末摘花の 紅に

さきてまらるゝ 岩つゝじかな

盧橘

うたゝねの　とこよをかけて　匂ふなり

夢の枕の　軒のたち花

藤原爲明

貞和百首の歌に

山陰の　くらきかたより　見ぬうめて

なつみの河に　飛ぶ螢かな

藤原公泰

月前蟲といふ事を

深き夜の　露に草葉は　埋もれて

蟲の音たかし　野への月かけ

頓阿法師

鹽屋月といふ事を

須磨のあまの　心や月に　なびくらん

煙がよわる　浦のしほがま

藤原雅有

題しらず

あさみどり　かすむをみれば　志がの浦や

藤原成國

久安百首歌に

櫻花　木の本ごとに　吹きためて

れのが物とや　風のみるらん

上西門院兵衛

題しらず

下葉まで　色づく野邊の　秋萩は

花にあまりて　露やおくらん

橘遠村

山を

足引の　山のふる道　跡たねて

尾上の鐘に　月が残れる

如願法師

述懐の心を

我身のみ　まづみやはてん　わたつ海の

おきつ沙あひの　あはれ世の中

前大僧正道玄

樵夫をよめる

丹波忠守

行きつるゝ まづが姿は みねわかで

妻木の眞柴 山路こゆなり

(以上十二首新續古今和歌集)

日本大文學史卷の三終



著作權所有

明治卅二年八月九日印刷
明治卅二年八月二十日發行

定價金四拾錢

著者 大和田建樹

東京市日本橋區本町三丁目八番地

發行者 大橋新太郎

東京市日本橋區兜町二番地

印刷者 三井駒治

東京市日本橋區兜町二番地

印刷所 東京印刷株式會社

東京市日本橋區本町三丁目

發兌元 博文館

日本大文學史卷の二目次及批評

卷の二目次

六月四日發行

第三編 中古の文學

第四期 延喜天曆

第廿二章 概説

第四期の區域○山城京都○勸學田○天台眞言の二宗○貴族子弟の就學○醫術の發
○嵯峨の朝○仁明清和の朝○延喜天曆○平安京の地形○女性の文學○佛法の弘通
○漢學の勢力○短歌の孤立○佛法と漢學との功罪○國文大に興る

第廿三章 言語の變遷

發音の變動○用語の變動○漢語佛語の混和○音便の現出

第廿四章 漢學の勢力

漢文の名作○詩の名作○四六文體○對句の構造○詩文の和習○白氏文集○私學校

大和物語○落窪物語

齋部廣成○小野小町○在原業平○藤原敏行○僧正通照○在原行平○素性法師○文屋康秀○大江千里○菅原道真○紀友則○伊勢○中務○藤原兼輔○檢校通○源宗子○大友黑主○凡河内躬恒○坂上是則○紀貫之○清原深養父○壬生忠岑○藤原信明○齋宮女御○藤原道綱の母○源順○清原元輔○平兼盛○壬生忠見○大中臣能宣○曾爾好忠○藤原實方○源重之

第卅一章 散文の作例

第卅二章 韻文の作例

第五期 源氏物語時代

第卅三章 概説

第五期の區域○定子中宮○上東門院○才女の輩出○藤氏の榮花○泰平後の戦亂

第卅四章 散文の盛運

源氏物語○源氏物語の盛運

批評

▲史學界評……大文學史の第二卷は第三編中古の文學を記述し、分ちて延喜天曆、源氏物語時代の二期となし、十八章より成り。概説、言語の變遷、漢學の勢力、假名の發明、長歌の頓挫、當期の歌謠、短歌の隆興、散文の勃興、及著名の作者の小傳と散文、韻文の作例とを以て前半となし、概説、散文の盛運、和文體の歴史、和歌の状態と作者傳及作例を以て後半となす。通じて三百頁、作例は其半に上りて最豐富なれば著者が所謂瀛車旅行の停車場毎に下車して遊覽する爲には最適したる好著述と謂ふ可し。
▲東京經濟雜誌評……中古の文學、即ち延喜天曆より源氏物語時代に

起る○漢文の著作○詩文の名案○國史の編纂○乎古止點

第廿五章 假名の發明

平假名○弘法大師○片假名○吉備眞備

第廿六章 長歌の頓挫

和歌衰頹の敵○興福寺僧の作○古今集時代の作○萬葉集との比較○句格の變遷○五七體○七五體

第廿七章 當期の歌謠

歌謠との分離○儀式的の歌謠○神樂歌○龍馬樂○之に屬せる樂器○其句格○其用語○其章段○風俗歌○今樣歌○和歌の起源

第廿八章 短歌の興隆

○六歌仙○宇多醍醐の兩帝○古今和歌集○村上天皇○後醍醐和歌集○古今和歌六帖○家集○歌合○物の名○折句○沓冠○日本紀勢宴の歌

第廿九章 散文の勃興

前代の發物○貫之の慷慨○歌集の詞書○歌集の序○試作の時代○土佐日記○蜻蛉日記○竹取物語○伊勢物語○空想物語○

や物語○源松中納言物語○其他の古物語○唐物語○今昔物語○宇治拾遺○日記紀行の文○和泉式部日記○紫式部日記○更科日記○源氏物語日記○枕草子○消息文

第卅五章 和文體の歴史

物體體歴史の作○大鏡○榮花物語○續世

第卅六章 和歌の状態

拾遺和歌集○後拾遺和歌集○金葉和歌集○詞花和歌集○千載和歌集○私撰歌集○歌合○歌學○題詠○連歌○落首○今樣歌○漢詩思想○佛教思想

第卅七章 著名の作者

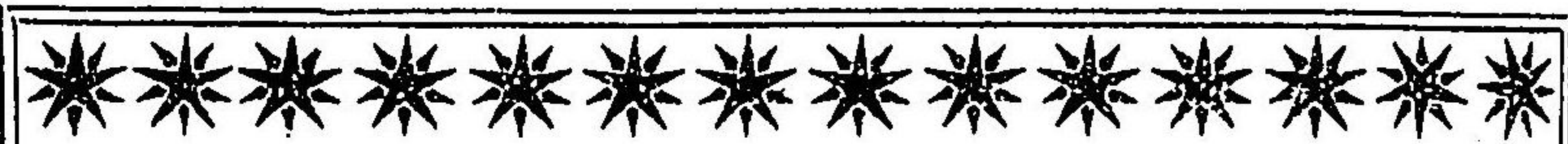
藤原公任○和泉式部○紫式部○赤染衛門○伊勢大輔○清少納言○大貳三位○能因法師○相模○菅原孝標の女○源隆國○源岐興侍○源經信○藤原顯季○源俊賴○藤原基俊○藤原爲業○藤原顯輔○堀河○藤原清輔○源賴政○平忠度○中山忠親

第卅八章 散文の作例

第卅九章 韻文の作例

以上

在る、日本文學の最も多方面に發達したる盛時を叙す、蓋し日本文學の精華は桓武の奠都と共に一時開發し、之より源平時代に至るの間古今集成り、源氏出で、六歌仙あり、才媛の輩出あり濃紅深紫殆んど人目を眩せんとなす、事實已に斯くの如し、著者の筆愈々趣を添え來るも故なきに非るなり、體裁編例凡て第一卷と同じ。
▲大阪毎日新聞評……前卷に次で第三編中古の文學を第四期延喜天曆及び第五期源氏物語時代の二期に分ち言語の變遷、漢文の勢力、假名の發明、長歌の頓挫、短歌の興隆、散文の勃興并に作者、作例、盛運、和文體の歴史、和歌の状態等を概説し簡潔よく其體を得たり吾輩は著者が貢獻の勞を多とするものなり。
▲神戸又新日報評……大和田建樹氏の新著にして前卷に引續き延喜天曆時代の日本文學を類を分ち章を重ねて詳細に論敘せり。



避暑納涼の清友

- 野崎左文君著 (廿版) **改正漫遊案内** 全壹册 郵稅四拾美錢
- 大橋乙羽君著 (五版) **千山萬水** 全壹册 郵稅四拾美錢
- 三宅青軒君著 **旅行案内** 全壹册 郵稅四拾美錢
- 江見水陰君著 **汽車の友** 全壹册 郵稅三拾美錢
- 櫻井陽村君著 **初航海** 全壹册 郵稅四拾美錢
- 遠山熙君著 **艇競漕** 全壹册 郵稅四拾美錢

- 稻田實君著 **新游泳術** 全壹册 郵稅四拾美錢
- 土井晚翠君著 **天地有情** 全壹册 郵稅四拾美錢
- 大町桂月君著 **黃菊白菊** 全壹册 郵稅三拾美錢
- 大町、鹽井、武島三君著 **花紅葉** 全壹册 郵稅三拾美錢
- 少年世界臨時增刊 **海軍の光** 全壹册 郵稅貳拾美錢
- 文藝俱樂部臨時增刊(八月) **第一一講談揃** 全壹册 郵稅貳拾美錢

博文館發兌



每月壹回發行每編密畫挿入
全部壹百册○洋裝菊判八拾頁

巖谷漣 山人著 世界お伽噺

定價 壹册 金七拾錢
拾貳册前金七拾八錢
郵稅 壹册 金貳錢

著名文學士法學士大家執筆
全部廿四册○洋裝菊判百二十頁

每月一回發兌 世界歴史譚

定價 壹册 金七拾三錢
拾貳册前金七拾三錢
郵稅 壹册 金四錢

6	5	4	3	2	1
獨逸	英國	獨逸	南洋	支那	太古
鬼婆と少女	無人島	魔法博士	珊瑚島	五色の石	世界の始
中村不折	附兵卒と悪魔	附ロビンソン	附丸木	附指南車	附人間の始
12	11	10	9	8	7
英國	英國	支那	獨逸	亞細亞	獨逸
大人島	小人島	檀特山	七人冠者	奇怪の洋燈	法螺先生
附井島	附井島	尾形月耕	附二人王子	附大羽	山中古洞

6	5	4	3	2	1
獨逸	英國	獨逸	南洋	支那	太古
麻婆	漢尼拔	比斯麥	耶蘇	孔子	釋迦
北坂進	坂本	波部	大町	征川	上田
12	11	10	9	8	7
英國	英國	支那	獨逸	亞細亞	獨逸
沙翁	破拿翁	歷山王	漢高祖	岳飛	俄拔兒
藤井	土井	幸田	三浦	征川	中村

日本大文學史卷の四目次

第五編 近世の文學

第八期 元祿以前

第五十九章 概説

第八期の區域——徳川家康と漢學者——古書の搜索と其刊行
——道春と學校——昌平齋——學問の隆盛——朱子學派起る
復古學派起る——古學派起る——折衷學派起る——支那崇拜
の學風——漢學者中の國學者——歌人中の國學者——契沖と
水戸中納言——小説家——院本家——俳諧者——學派の割據

第六十章 當期の散文

言文一致體——通俗體——漢學者の文——國學者の文

第六十一章 淨瑠璃の著作

其起原——小野のお通——衆説中の一二——十二段冊子——

近松門左衛門——或人の評——謂はゆる近松文學……………二二

第六十二章 當時の歌謠……………二二

平民的歌曲——其佳調——其種類——其品位——琴唄……………二二

第六十三章 俳諧の發達……………三一

連歌と俳諧——發句——起原——貞徳派——宗因派——宗且派——蕉風の振興——芭蕉の門下……………三一

第六十四章 國學の勃興……………三五

季吟と契沖——解釋の書——假名遣の復古——研究の方針定まる……………三五

第六十五章 著名の作者……………三七

細川幽齋……………三七

烏丸光廣……………三八

松永貞徳……………三九

深草元政……………四〇

西山宗因……………四三

下河邊長流……………四四

井原西鶴……………四五

淺井了意……………四五

松尾芭蕉……………四六

僧契沖……………四七

北村季吟……………四八

第六十六章 散文の作例……………四九

東の道の記の内(烏丸光廣)……………四九

石山詣の記(松永貞徳)……………五五

江戸名所の内(淺井了意)……………五八

明暦の大火(同じ人)……………六二

松月菴の記(北村季吟)……………六六

第六十七章 韻文の作例……………六六

短歌十五首……………七〇

俳諧八句……………七三

第九期 元祿以後

第六十八章 概 説……………七四

第九期の區域——藩々教育の方針——學風の競争——文學の四分五裂——通俗文體其内に興る——其妨害者——賴麿の日本外史——國學者の自棄——國學の専門おこる——小説の種類ふゆ——韻文界また隆盛に向ふ——四分五裂の效果如何

第六十九章 國學の隆盛……………八一

國學道統の四大家——春滿と國學校——春滿の著書——眞淵と古歌古文の註釋——宣長と古事記——眞淵と宣長との門下——國學者と漢學者の衝突——篤胤と其異教攻撃——其著書禁止の幕命——國學遂に雲上に及ぶ——國學者と 王家

第七十章 國文と和歌……………八九

古體歌文の恢復——謂はゆる古風の和歌——通俗的の和歌——歌人の輩出——民間歌集の編輯——景樹と文雄——長歌

第七十一章 語學と辭書……………九九

の作者——遊翁と近調——守部と長歌撰格
假名遣の一定——枕詞の研究——てにをはと語格——辭書編纂の端緒

第七十二章 俳文俳句と狂文狂歌……………一〇〇

俳文の例——狂文の例——漢文國文の感化——當期の俳諧——狂歌の來歴——狂歌の標本

第七十三章 小説と戯曲……………一〇九

洒落本——讀本——草雙子——人情本——浮瑠璃の作

第七十四章 西洋學の創始……………一〇九

白石の著書——洋書講習の始——通事に對する其允許——杉田玄伯と解體新書——地誌歴史の翻譯——西洋文典の創始——洋和辭書の起原——魯英語の學習——翻譯方と舊書和解

第七十五章 著名の作者……………一一八

榎本其角……………

服部嵐雪	一一八
貝原益軒	一一八
森川許六	一一九
近松門左衛門	一一九
新井白石	一二〇
各務支考	一二一
室鳩巢	一二一
荷田春滿	一二二
平泉鬼貫	一二三
紀海音	一二三
竹田出雲	一二三
長谷川千四	一二四
並木千柳	一二四
近松半二	一二四

櫻井吏登	一二四
三好松洛	一二五
柳澤淇園	一二五
加茂真淵	一二五
千代尼	一二七
富士谷成章	一二八
平賀源内	一二八
湯淺常山	一二九
與謝蕪村	一二九
横井也有	一二九
大島蓼太	一三〇
加藤曉臺	一三〇
小澤蘆庵	一三〇
橘南谿	一三一

本居宣長	一三二
唐衣橘州	一三四
荒木田久老	一三四
伴蒿蹊	一三五
感和亭鬼武	一三五
加藤千蔭	一三六
上田秋成	一三六
村田春海	一三六
手柄岡持	一三七
山東京傳	一三七
瀧亭鯉丈	一三八
梅暮里谷峨	一三八
式亭三馬	一三八
太田南畝	一四〇

清水濱臣	一四一
俳諧寺一茶	一四二
本居春庭	一四二
白川樂翁	一四二
鶴屋南北	一四三
石川雅望	一四三
十返舎一九	一四四
本居大平	一四七
藤井高尙	一四八
爲永春水	一四八
香川景樹	一四九
平田篤胤	一五一
曲亭馬琴	一五三
海野遊翁	一五七

橘守部	一五八
黒澤翁滿	一五八
千種有功	一五八
加納諸平	一五八
足代弘訓	一六〇
小林歌城	一六〇
萩原廣道	一六〇
中原廣足	一六一
井上文雄	一六一
第七十六章 散文の作例	
教訓二つ三つ(貝原益軒)	一六二
地震(新井白石)	一六六
五字と七字の訓(室鳩巢)	一七四
秋篠與平(柳澤淇園)	一七六

岡部の家(加茂真淵)	一七九
太田道灌の和歌(湯淺常山)	一八二
三尊窟(橋南谿)	一八四
繪のこと(本居宣長)	一八九
里祭(伴蒿谿)	一九六
閑田廬の花の記(同じ人)	一九七
雨(白川樂翁)	一九九
忘れたり(同じ人)	二〇三
櫻の詞(本居大平)	二〇三
本のしづく(藤井高尙)	二〇五
富山の洞(曲亭馬琴)	二一一
樺島の浪風(中島廣足)	二一九
第七十七章 韻文の作例	
其一 短歌	

諸家々集より……………二二五

其二 長歌……………二三八

諸家々集より……………二三八

其三 俳諧……………二四六

諸家句集より……………二四六

其四 淨瑠璃……………二五〇

八島の浦(近松門左衛門)……………二五〇

十本の矢(紀海音)……………二五九

日本大文學史卷の四目次終

日本大文學史卷の四

大和田建樹著

第五編 近世の文學

第八期 元祿以前

第五十九章 概説

第八期の區域——徳川家康と漢學者——古書の研究と其刊行——道春と學校——昌平黌——學問の隆盛——朱子學派起る——復古學派起る——古學派起る——折衷學派起る——支那崇拜の學風——漢學者中の國學者——歌人中の國學者——契沖と水戸中納言——小説家——院本家——俳諧者——學派の割據

徳川家康天下を一統して江戸幕府を開き、慶長元和の頃に起りて、江戸時代の隆盛なりといはれし元祿年間に終る。これを第八期とす。亂れはてたる戰國文學を束ねて。謂はゆる元祿文學を大成するに至りし間の時代なり。

第八期の區域

徳川家康と漢學者

古書の搜索と其刊行

江戸三百年の天下。一たび家康の手に歸せしより。大いに心を學事教育の道に寄せ。藤原惺窩を聘し。林道春を用ひて。先づ漢學講習の業を起し。次に多年兵亂の紛れに散り失はれし和漢の古書を搜索し。之を世に出ださんと盡力せしかば。追々に集まりて學者を利し。遂に之を上木するものゝ陸續出來りしは。實に慶長年間を以て其始とするなり。駿府記に曰く。

慶長十六年

九月十六日 吉田の神龍院梵舜藤原系圖一卷を進る。

同 十九日 今日建武式目林道春をして之を讀み。其得失を議論せしめ給ふ。

十月朔日 舟橋式部少輔秀賢京都より着府。諸家略系圖を獻る。

十一月十八日 鎌倉の莊嚴院出仕。云々。保曆間記所持の由之を申す。保元より曆應に至るまで治亂粗ぼ記す所と。云々。則ち其書御覽あるべき旨仰せ出ださる。

同 十七年

二月十四日 御前に於て。東鑑盛衰記の異同。之を考へしめ給ふ。

三月十日 伊豆山の般若院快運續日本紀を獻る。道春をして之を讀ましめ給ふ。

同 十九年

四月五日 群書治要。貞觀政要。續日本紀。延喜式。御前より五山の衆に出だし。公家武家の法度たるべき處を拔書せしむべき旨仰せ出ださる。金地院の崇傳。道春。之を承る。

同 十三日 今日。群書治要。續日本紀。延喜式。等の拔書。御前に進上す。金地院。道春。御前に於て之を讀む。

同 二十日 仰に曰く。公家中の法式記し定むる爲めに。諸公家の記録。皆書寫之あるべき旨。三代實錄は西三條所持の由を仰せらる。

六月二日 今日。卷本の續日本紀。不足の所十卷。此内五山の衆に仰せて書き寫し續がしめ給ひ。御前に捧ぐ。

八月十九日 律令到來す。是は金澤文庫の本。關白秀次之を執り。今出川殿に之を遣さる。今日之を進らる。令三十篇。内十篇不足。律二卷之あり。

九月七日 今日。舟橋秀賢死去に依つて。繼目の御禮として。舟橋大炊介參着。秀賢の男なり。遺物として三代實錄之を獻る。内十卷不足。云々。

十月廿七日 今日。五山の衆五十人。南禪寺金地院に於て。諸家の記録一本三部宛寫さしめ。一部は禁中。一部は江戸。一部は駿府に置かしめ給ふべき由。傳長老。道春。之を奉はる。

十一月六日 今日。吉田の神龍院。諸家の系圖七冊之を進上す。

同日 九月 南光坊傳長老を奥の御座の間に召して御雜談。今度諸

家の記録御寫に就きて。日本後紀。弘仁貞觀の格式。類聚三代格等。仙洞に之有りや否。南光坊を以て仰せ遣さる。記録の書立は則ち傳長老。道春。之を奉はる。南光坊參りて奏せらるゝところ。御所持の本書き寫さるべき旨云々。

同日 今日仙洞より。類聚三代格六卷。聖武より後一條の院迄。年代略十九卷。類聚國史二卷。古語拾遺等。南光坊院使と爲りて持參。夜に及びて道春御前に於て之を讀む。云々。

十二月廿六日 傳長老御前に出づ。今度仰せ出ださるゝ記録等の内。舊事本紀。古事記。續日本紀。文德實錄。三代實錄。江家次第。明月記。續文粹。管家文章。西宮記。釋日本記。内裡式。山槐記。類聚三代格等。之を獻る。

同 二十年

六月九日

今日。傳長老本朝文粹兩部を持ちて御覽に備ふ。件の

本は甲州身延より到來す。仍て先日五山の僧に仰せて書き寫さしめ給ふ處なり。第一の卷不足の處。道春京都に於て之を探り出だし。御覽に備ふ。仍て急に寫し補ふべき由仰せ出ださる。此一巻出來奇特の旨。頗る御感云々。

と。以て其一端を想像するを得べし。誰か知らん。世の古本店に於て容易く得來りしところの書。始を問へば此くの如く得難く讀み難きの秘本なりしことを。

道春と學校

道春は京都に一の學校を建てん事を請ひ。家康も之を賛して認可したりしに。大阪陣の騒ぎ起り。間もなく家康薨せしかば。其事成らずして止みぬ。依りて道春は江戸の忍間に弘文館といふを私設して。聊か學校の形を學びおたり。抑も我國にて學校を置きしは。上古天智天皇の御宇に起りて。中古の初には大學國學の官立あり。勸學學館淳和非學等の私設あり。近古に至りては下野

に足利學校あり武藏に金澤文庫あるのみなりしが。中古のは名のみ残りて其實なく。近古のは邊土の地にありて又振はず。よりに今これを都會に起して。亂世の餘民を導き。以て文明徳行の士民たらしめんとの希望に出でしなるべし。

昌平塾

かくて道春は世襲して徳川氏に仕へ。文學を司る家となり。天下は治世となるまゝに文教漸く行はれしが。五代將軍綱吉は大いに儒教の奨勵者なりしかば。道春の孫鳳岡に命じて。かの弘文館を湯島に移し。之を徳川氏の管轄に歸せしめたり。名づけて昌平塾と云ふ。實に元祿三年なりき。

學問の隆盛

今や泰平の氣象は六十餘州を包み。また學海の針路に遮るものなければ。諸藩も徳川氏に習ひて學校を設け。儒者を聘し。教育の普及を企てざる限もなし。りの漢學の一將となつて旗を京都に揚ぐるものには。山崎闇齋あり。貝原益軒あり。中村惕齋あり。江戸の陣には木下順庵あり。新井白石あり。室鳩巢あり。水戸の砦には明國の歸化人朱舜水と。安積澹泊とあり。何れも相應じて朱子學を祖述す。此に於て伊藤仁齋は更に一旗を翻して復古學を唱へ。

朱子學派起る

復古學派起る

古學派起る

朱子學に反抗の陣を京都に張れり。之を始として。初は朱子學派たりし荻生徂徠。また其非を悟りて新に古學の一門を江戸に開き。遙に仁齋に聲援せしかば。軍勢いよく振ひわたりぬ。

折衷學派起る

物の極端に走る時は必ず僻す。中正の文字を揚げて其間に現はるゝものあるは。社會古今の通習なり。此に於て折衷學といふもの起る。そは古學派の説をも容れ。朱子學派の説をも捨てずして。一意孔子を祖述するに在るなり。りの最も勢力ありしは。井上金蟻。山本北山。太田錦城。などゝす。但し折衷學の起りしは後年にあれども。序なれば此にいふのみ。

支那崇拜の學風

漢學かくの如く隆盛を極めたり。りの極は此に支那崇拜の學風を現出し。聖人あるを知つて朝廷あるを知らざる腐儒曲學の徒を出ださんとす。山崎闇齋ある時門人を試むるに。堯舜これが大將と爲り。孔子孟子これが副將と爲り。今假に我國に向ふとせば。りの時の所置如何と。門人互に顔見合はせて。答ふるところを知らざる有様なりき。荻生徂徠は東夷之民と自稱せし事さへ有りき。いかに不思議千萬なる世の中ならずや。斯くまであさましき學風を作

漢學者中の國學者

りなしたるものは抑も誰ぞ。徳川氏が先づ之を獎勵せしに因るとはいへども。我國の事を後にして彼國の書にのみ親密なりしが爲め。知らずゝ事の此に至れるのみ。後の外國學するもの深く戒めざるへけんや。

歌人中の國學者

然れども泰平の光は。獨り漢學をのみ生育するに止まらずして。彼學者の中よりも。道春。闇齋。白石の如き國學兼修の博士を出だし。近古の遺物たる歌人連歌師の中より國學専門の博士を出だし。中にも北村季吟は其録々たるものなりしかば。元祿二年幕府の歌學所に召し出だされ歌學を以て仕ふる家となりぬ。世は日に春めかんとするなり。

契沖と水戸中納言

民間には大阪に僧契沖出でゝ假名遣の復古を唱へ。亂れに亂れし歌學語學を統轄して正路に歸せしめんとせしかば。水戸中納言徳川光圀は。尊王の志を懐きて心を古典國史に潜むるの折からなれば。之を聘せんと欲したれども遂に應ぜず。よりにて家臣安藤爲章を入門せしめて契沖の説を用ひ。大いに國學擴張の旗を差し立てたり。此に於て大日本史の如き。禮儀類典の如き。扶桑拾葉集の如き。斯道必須の書は水戸より出で。尊内卑外の風はじめて振ひ

小説家
院本家
俳諧者

元祿の天地は暖き春の光もて たされんとす。又一方には井原西鶴の如き。近松門左衛門の如きありて。小説院本を著し。芭蕉其角出で俳諧を起しなどせしかば。元祿年中に至りて徳川氏の文學は競ひ起り。幾百年間。長暗冥の内に失はれぬたる光明を。こゝに始めて發するの機會を得たり。

學派の割據

然れども概言すれば。漢學は士人社會を專有して未だ民間に入らず。小説院本は女子と下流社會とを專有して未だ士人社會に容れられず。國學獨り其間に在つて。或は士人を友とし。或は女子平民を友とするに似たれど。猶その成功を見ずして學派割據の姿を爲したり。而して其筆にするところの文章。漢學者には漢文の語氣あり。國學者には古文の語氣あり。小説院本家には卑俗の語氣ありて。互に相親しまざること。なほ彼學派と伴なひて離れず。然らば元祿以前の時代を代表せしむべき散文は如何。請ふ次の章に於て説くを聞け。

第六十章 當期の散文

言文一致體——通俗體——漢學者の文——國學者の文

言文一致體

當期の散文として紹介すべきものは抑も如何。慶長の頃の人の記せりといふおあん物語に曰く。

子供集まりて。おあん様昔物語なさりませといへば。おれが親父は山田玄曆というて石田治部少輔殿に奉公し。近江の彦根に居られたが。その後治部殿御謀反の時。美濃の國大垣の城へこもりて。我々皆々一所に御城にゐておじやつたが。不思議な事がおじやつた。夜なく九つ時分に。誰ともなく男女三十人程の聲にて。田中兵部どのう。田中兵部どのうとをめぐきて。其あとにてわつとというて泣く聲が。夜なくしておじやつた。おどまじやく恐ろしうおじやつた。

その後家康様より攻衆大勢城へ向はれて。いくさが夜盡おじやつた。其寄手の大將は田中兵部殿と申すでおじやる。石火矢を打つ時は。城の近所を觸れ廻りておじやつた。うれはなぜなりや。石火矢を打てば櫓もゆ

る／＼動き。地も裂けるやうにすさまじいさかひに。氣の弱き婦人なずは。即時に目をまはして難義した。其故に前方に觸れておいた。其觸があれば。光りものがして雷の鳴るを待つやうな心しておじやつた。始めの程は生きた心地もなく。唯物恐ろしやこはやとばかり我人おもうた。後々は何ともおじやるものじやない。我々母人も其外家人の内儀達も。皆々天守に居て鐵砲玉を鑄ました。

當時の人の物語する音調はおろか。顔附までも目の前に浮ぶ心地せられて。天真爛漫たる言文一致體の文といふべし。然らばこれらを當時散文の代表者とせんか。いな／＼言文一致體の文も頗る行はれしといへども。遂に勝を制して謂はゆる文章と公認せられしは。言文一致體の外にありしは事實なれば。唯うの一例に供するまでにて止まんとす。

通俗體

東海道名所記に曰く。

いとほしき子には旅をさせよといふ事あり。萬事思ひ知るものは旅にまさる事なし。鄙の長路を行き過ぐるには。物うき事。うれしき事。腹の

立つ事。面白き事。あはれなる事。恐ろしき事。あぶなき事。をかしき事。とり／＼さま／＼なり。人の心も言葉つきも。國により所により。おのれ／＼の生れつき。花車もあり。賤しきもあり。うれのみならず。道すがらには。海川山坂橋平地。石原砂原細道畔道追分などて是あり。道の助けには。大雪に山越し。大水に川越し。深き川に渡船。乗掛に駄賃馬。或は歩いて行く人の爲め。からしりの馬駕乗物。或は馬のなき時は。かち荷物のたすけもあり。知らぬ道には案内者あり。旅屋の遠き所には店屋の餅團子。茶屋の焼餅。其外在所により家によりて。國の名物酒肴賣色々あり。一日路すぎて暮方には。旅屋の宿泊々これあり。是を昔は驛館とだにいへば。人おうれて立ちのきけり。今の世までも驛馬々々といへば。道ゆく人も傍へ立ちのくは。此事よりも言ひ傳へたる言葉とかや。

此文に至りては。既に言文の一致を離れて決して言文の親睦を失はず。いさゝか小説家めきたる筆法こりあれ。雅にして迂ならず。俗にして卑しからざ

る點を備へたるは。寧ろ和漢學者の彫琢を加へたる文章よりも。當時普通文の代表者として取らんとするなり。

然れども一步退いて考ふる時は。是等は寧ろ俗文に近く。一時の戯文として見るべきものなれば。時文の模範となりて時人の視線を此に集めたりしとは言ふべからず。人あの一我程度に合ひたるものは。同情を表して之を喜べども。之を手本とすべき的たるものは。常に我程度以上にある習ひなれば。

我自然自在の言葉もて我自然自在の思想を書きあらはさんとする外には。和漢學者の筆法に習はんとする傾もありしならん。是れ固より亂世後の文學を泰平の御世に引き返すべき至常順序といふべきなり。

漢學者の文

貝原益軒の文に曰く。

わが身の行ひの善惡は。世人の譽め毀りを。あながちに常にして喜び懼るべからず。たゞ道理をもて法とすべし。わが行ひ道理にかなはず。世こざりて毀るとも懼るべからず。わが行ひ道理に背かば。世こざりて譽むとも喜ぶべからず。善き人に譽められ惡しき人に毀らるゝこり君子と

はいふべけれ。人毎に譽むるものは却りて疑はし。多くは巧にして飾れる人なるべし。(大和俗訓)

新井白石の文に曰く。

廣元累世王家の臣として頼朝をたすけ。六十州をして其掌握に歸せしめ。義時をたすけて承久の謀主たり。此人當時の望ありしかば。時政が一幡を殺せし時も。かれを假りて自らをなし。およう義時が奸詐を恣にする。常にかれを假りて私を營みき。されば此人ひとり朝家に背きしのみにあらず。頼朝にも背きたり。その柔佞多智。是も又義時の亞なるべし。玉海に。頼朝廣元に委ぬるに腹心を以てす。恐らくは獅子身中の虫なりとのたまひし事。先見の明ありといふべし。(讀史餘論)

漢學者の文

北村季吟の文に曰く。

ある人の言ひけらし。嵐山の春の盛り廣澤の秋のながめも。古へよりの名にこり負へれ。なほ花やかなる好ましきは。東山のべにしくはなきに。なにがし紹性のぬしの松月の庵は。八坂の里のわたりなれば。九重の内

も遠からず。かみのそのに詣づるついで。清水のかへるさにも。立ちよるたよりをかじげなり。そもは竹の枝折戸かりうめなれど。奥の住居かはらかに。紅葉を焚き茶を煮る友を招く設けも。あたりくつきくし。

庵の西に柿本の御社あり。前は明石の浦おぼえたる池水の流れ。鳥このめるやうも目とまりて。朝霧の籬の内に。春の花さくべき梢をまじへて。尾花葛花朝顔の花。露のひかり虫の聲々も。わざとならねど心あるさまに見えわたるなど。此ほどの空のながめずかし。(松月庵記)

僧契沖の文に曰く。

浅小井氏武藏の國に歸らんとす。相知りて交はるほども少なけれど。睦ましかるべき故ありていと馴れたるを。更に悔しき心地す。さきに物語のついで自らいふ。浅小井は伴氏なり。近江の國甲賀郡に類おほし。蒲生郡浅小井にながれ。やがてうこを継ぎたりとす。此わたりを大伴のみつ高師などいふ故知りがたけれど。金村の大連。難波の私の家に籠りか

られけるよし書にしるしたれば。その昔よりこのうから領じけるにやあらん。(贈浅小井氏詞)

前の二文は漢學者の和文にして。後の二文は和學者の和文なり。これを東海道名所記に比し。更におあん物語に比すれば。彼は家族團欒の圍爐裏の邊に打ちとけて物語するが如く。此は正服を着用して講堂に講義を聞き。雲の上人の御前に昔語を承る心地やせまし。さはいへ其氣品の高さに至りては。とても前者の後者に及ばざるは。言を俟ちて後に知らざらんとす。文いやしくも解し得らるゝをもて最終の目的とするものならば止みなん。これが上に美文たる品位を高むべきものなりとせば。當時の文また。是等の作者に導かれつゝ進みし事を忘れてあるべからず。

第六十一章 淨瑠璃の著作

其起原——小野のお通——衆説中の一二——十二段冊子——近松門左衛門——或人の評——謂はゆる近松文學

能は既に高尙殿正なる武家の式樂となりて上流社會に行はれ。今や僅かに其道のもの、増補改削を爲す事はあれども。もはや新作を出だして文學者の腕を振はすべき餘地なきものと定まりたり。されば新に來らんとする氣運に乗じて。民間に歡迎せらるべき院本作者の出でたるは。又自然の勢ならずや。院本の作名づけて淨瑠璃といふ。今の起原を尋ぬるに。後陽成天皇の頃に當りて。小野のお通といへる女ありき。その履歷と之を作りし由來とは。衆説紛々として詳ならざれども。とにかく文筆に優れたる才女なりしは疑ふべからず。此人。參河の國矢矧の長者の娘淨瑠璃姫と。源義朝の九男牛若丸との物語を十二段の冊子に作りたるが。遂に名高くなりて。其後三味線に合はせ謠はるゝに至れり。之を淨瑠璃といふ名の起りとす。

其起原

小野のお通

衆説中の二

今今の紛々たる衆説中の一二を抜き出で、此に示さん。豊臣大閤の御臺所の侍女に小野のお通といへる女ありしが。御臺ある時之を召して宣ふやう。古へ才藝ある女は皆今の徳を末世に傳へざるなし。あはれ御身も何か後世に残るものを書きおかれよと。此に於て十二段の物語を書きて奉りしに。御臺御

感のあまり太閤の御覽に備へ給ひしかば。太閤取り上げ御覽じて。是程のものを其儘に捨て置かんも惜しき事なりとて。岩船檢校に命じ。節附して謠はるゝやうになし給へりと。是は江戸名所咄に出でたる説なり。

今一つ昔々物語に載せたる説は。織田信長ある時病のため夜も眠る事あたはず。城玄勾當。角都勾當。小野のお通の三人。常に御側を去らずして看護せしが。城玄角都一同に申しけるやう。お通は聞えし文者なれば。何か面白きものを作りて御耳に入れ候はゞ。いかに御慰みにもなり申すべしと。

よりてお通に仰せて作らせ給ひしが。十二段の物語なり。信長を始として何れも感に堪へざるはなく。毎夜々々くりかへしく讀む程に。後には飽きて眠出づるに至りぬ。

今の時二人の勾當申しけるは。同じ事を讀むばかりにては如何にて候へば。之に節を附けて謠ひ候はゞ然るべしと。信長げにもとて。丹後七郎左衛門と橋本筑後との二人に命じて節附せしむ。かくて毎夜うたふに如何にも面白かりしかば。又此上は三味線に合はせ然るべしとて。城玄角都の手を附けた

り。いよく面白く興添ひしかば。信長いま一流こしらへよとて。各二人の
勾當をして。源頼光大江山酒顛童子退治の事を作らしめ給ひぬ。是より普く
世に流布し。遂に芝居を進歩せしむるの端緒とはなりしなりと。

かくてお通を或書には鹽川志摩守が後妻とし。或は鹽野喜太郎の妻たりしが。
夫の酒狂せるにわびて。一人の娘を連れ離別せしものとせり。うの他何くれ
と説きたるもあれど。何れに信を置くべきを知らず。

十二段冊子

さても此十二段冊子とも淨瑠璃物語ともいふ曲よ。遠くは平家物語に擬し。
近くは草紙に摸し作りたるものなれども。遂に世を風靡して。謂はゆる平民
文學の祖と仰がしむるに至りしは。お通の才人ならざるにあらざりせば如何
でか然るを得ん。筆力もとより彼等に及ばずといへども。卒先して當時の人
情を満足せしめしは。其功あに其下にあらんや。左の數行を讀みて。其文體
の如何なりしかを知るべし。

彌生なかばの頃なるに。櫻梅桃李の春の花。木々の梢に咲き亂れ。大庚
嶺の梅の花。茂みが中の花ざかり。かくやと思ひ知られたり。御曹司は

木のもとに立ち忍び。散りゆく花を。左右の袂にかけとめて。古き詩歌
をながめて立ち給ふ。

げにや九重の塔。高しと申せども。燕が飛べば下にあり。劍の刃は早き
とて。岩の角をば削らぬもの。竹の林が高きとて。切利天へは登らぬも
の。參河にかけし入橋の。蜘蛛手にもや思ふらん。

近松門左衛門

元録の頃に至り。近松門左衛門いで。かの十二段冊子の遺志を擴張し。諸
曲を一變し。遂に此淨瑠璃なる戯曲を大成せり。時代物の士氣凜然たる世話
物の情緒纏綿たる。謂はゆる神祇釋教戀無常。曲ごとに節ごとに備はらざる
はなし。是より作者大家引きつぎきて現出し。徳川氏の平民社會は。こゝに
淨瑠璃時代を作らんとす。豈さかんならずや。

或人の評

人或は曰ふ。淨瑠璃は其言ふところ。多く殺伐殘忍に非ざれば卑猥落靡に傾
けり。士君子の見聞くべきものに非ずと。然れども其殺伐殘忍卑猥落靡に傾
くこそ。取りも直さず。讀者嗜好の反射にして。讀者嗜好の反射は即ち。風
俗人情の反射なれば。平民社會にのみ通俗文學の發達を放任し置きて。士人

謂はゆる近松文學

社會の學者流は之を冷遇し。之には耳目をも向けざりし結果に外ならず。之を度外視し之を冷遇して。高みより其缺點をのみ數へつゝ。曰く殘忍なり泰平の文字に非ず。曰く淫靡なり士君子の耳目を汚すべきものに非ず。曰く殺伐卑猥なり文學として數ふべからず。など無責任の評を爲すに至りては。迷へるの甚しきものなり。謂はゆる近松文學として千載の下に歡迎せらるゝに至りしは。即ち其社會を代表し。其社會を諷刺し。其社會を勸懲し。其社會を嘲罵せし筆力の健なる點にありて存す。さるにても起原を女性的文字に得て大成を男性的文字に見る。又時勢の變遷をも味ふべきなり。終に臨んで一言せん。近松文學の起原はかくの如しといへども。なほ其作者の筆を擯にせしは第九期の初にかゝりたるを以て。其傳に至りては之を後に掲ぐ。

第六十二章 當時の歌謠

平民的歌曲——其佳調——其種類——其品位——琴唄

平民的歌曲

既に催馬樂今様の時代は逝きぬ。小謠小歌の流行はあれども。其起原の前代に屬するものは。歌ひこそすれ新に作れる曲はあらず。今や世に反響するは全く俗曲の聲のみ。平民的歌曲の聲のみ。こゝに之を紹介するの必要を見るなり。

其佳調

その簡潔にして餘韻ながく。俗調にて雅味あふれたるものはと問はゞ。

○ 雨は降るとも 雪降るなさ

しのお細道の 笹のたわむに (腰組)

○ 門に立つたは 八もじさまか

夜風身の毒 内ござれ (比良や小松)

○ 去年の竹とよ 今年の竹とよ

しどろでもどろで のうさて 節が揃はぬ

なよさて誠に 節が揃はぬ (下總ほりり)

○ これは京小袖 色もよや

紋がら手際もよや 着よや

あら都 こひしやのう

都の染殿 戀しやのう (京鹿子)

○ 吹けよ松風 あがれよ簾

今の小唄の 主見たや (同上)

○ 朝間とくおきて 手水瓶を見れば

わが置かぬ花の あるも不思議やな (端手片撥)

○ 山雀が 籠の内での 恨み言

籠が小籠で もんどり打たれぬ (錦木)

○ 恨みながらも 又うち向ふ

月はゆかりか 愛き人の (投節)

○ 花におく露 小笹の霰

こぼれやすきは 我なみだ (同上)

○ よしやわざくれ 身は朝顔の

日影まつ間の 花のいろ

うらみられしも 恨みし人も

共に消ぬゆく 野邊の露 (加賀節)

○ 花と雪とは どれが吉野の ながめやら

どうやらかうやら わきて

色わかちなく どれが吉野の ながめやら

花やら雪やら わきて (わきてぶし)

○ 刈らばとく刈れ 淀野の眞菰

刈らば月かけ 下に澄む 底に澄む

○ 刈ればく月影 下にすむ 底にすむ (ふじから)

つるくと 出づる月を

松のねだで かくした

いざくらば きりても捨ちよやれ

松のねだの 下ねだ (てまり)

何となく無邪氣にして滑稽を帯び。深き意味はなけれど調みやびやかに聞きなざるは。

○ 天の川には 水こりまされ

さてもへんれ 逢ふ事ならぬへ

橋をやんれ 掛きよやれ

かさゝぎの 天竺の 天の川に

白いく 桶が流るゝ

奉公するとも 豆腐屋はいやよ

それなせに 七つ起きして 豆みがく

七つ起きして 豆みがく (天の川)

○ 引けやく 引けやく

牛のもうく 綱をへ

柴に櫻を 折りりへて

させいほうせい こりやどうだ

稻荷まわりの まわりの 稻荷振袖ゆかし

友禪模様で そんなれいへ

ねかた四十に 娘は十五

つめの模様で ゆかしへ

さいかち山へ のぼるとて

荒い風が もつけな 吹いて來た

脛の白さで えいとこな うんどこな

白さで脛の 脛の白さで 日をくらす (稻荷參)

○

今度長崎で かはつた小唄を、習うた

あとさきは 覺いなが

中の唱歌を わすれた

さこそあるべいとて 書いてもらつたが

うれさへ出口で ねとした

これ面目ない 首尾もしよわけも 此とほり

これ面目ない (失念)

其種類

いかに當時の人の言語の化石とも見るべき價ならずやは。かくて其行はるゝまゝに。名家次第に輩出し。之を口にし之を糸にするにも流派はほくなり。曲節の名も盡く記憶しがたき程の隆盛を來せり。今これを片はしより擧ぐれば。曰く本手組。曰く端手組。曰く裏組。曰く長唄。曰く隆達節。曰く弄齋節。曰く戀慕節。曰くほろり。曰く片撥。曰く投節。曰く織節。曰く土手節。曰く籬節。曰く加賀節。曰く滑り。曰く柴垣節。曰く丹前。曰く道念節。曰く古今節。曰く清掻。曰く歌念佛。曰く歌祭文。曰く小室節。曰く伊勢音頭。曰く小六節。曰く上方節。曰く潮來節。曰くゆりやす。曰く大盡舞の唱歌。曰く四竹節。曰く門説教。曰く讀賣。曰く木遣。曰く大津繪節。曰く江戸長唄。曰く何。曰くくれと。中々かゞへも盡されず。今の世に普く行はるゝ端唄都々の如きも。その源を共にせる同じ一河の流がかし。たゞ憾む。其行はるゝ區域高からざりしが爲め。唱歌もすれば野卑猥褻にして。心ある貴

其品位

顯紳士の前にて誦ひがたきを。されど是れ又元祿文學の一弊にして。獨り俗曲のみ然りしには非ず。

琴唄

今一つ語るべきは琴唄なり。其起原なる組唄といふものゝ唱歌に至りては。今様の遺風を傳へて。活潑の氣こそ缺きたれ。優美なる調べは泰平の餘響といふべし。見よかの。

弘徽殿の ほうどのに

たゞずむは たれく

朧月夜の 内侍のかみ

ひかる源氏の 大將

吉野川の 花いかだ

さすひまも あらじな

岩波たかき 山風

四方に散らす 花の香

雪のあしたの 嵐は

梢の花の 散る風情

なごりをしきは とにかくに

待ちねし君の かへるさ

のたぐひを。一たび讀めば。峯の嵐か松風か。尋ぬる人のうれならで。月ねぼろなる高殿より。けだかき調べの漏りくる心地せざらんや。うの起りは委しく知らされども。筑紫琴を世に弾き傳へしは。大永年間。筑紫の善導寺といふ寺の僧にして。其唱歌を作り撰びしは。慶永の頃。八橋檢校に始まりと言ひ傳へたり。

第六十三章 俳諧の發達

連歌と俳諧——發句——起原——貞徳派——宗因派——宗且派——蕉

風の振興——芭蕉の門下

連歌一變して俳諧ふこりぬ。其別を一言すれば。連歌は雅言もて連ねたるものにして。俳諧は俗語をも字音をも嫌はざるの點にあり。

連歌と俳諧

前わたりする 人にだきつく

橋板を すべる御主の 供をして

蘆間の島 たれつくるらん

百姓の 跡も難波の うらさびて

橋の板をも 引くかどが見る

大鼠 長柄の里に あつまりて

岡部を見れば 走りこりすれ

六彌太が 身のかんにんや なちざらん

茶湯釜でも 魚をこり煮れ

川水を こさでも桶に 入れて来て

の類を見て知るべし。此例は七字七字の句。即ち前わたりする云々の十四文字の句より起りたれど。五七五の謂はゆる短歌の上の句を初に置きたるものも。少なからず。其五七五の十七文字の句を名づけて俳諧の發句といへり。此發句のみを吟じて。一種の韻文と爲し。和歌に劣らず弄ぶ事も始まりしが。

發句

起原

貞徳派

宗因派

宗且派

蕉風の振興

弄ばるゝまにゝ。いよゝゝ發達進歩して。寸銀人を殺すの妙。和歌にては言はれぬ事をさへ言ひ得るの域に達するに至りぬ。あはれ前章に述べ來れる淨瑠璃といひ。俗曲といひ。今この俳諧といひ。謂はゆる平民文學の指南車たり。指令官たるものは。元祿の舞臺を約して出揃ひたるものと謂はざるべからず。徳川氏の歴史中に於て。人皆元祿時代を重しとするも宜なるかな。うもゝ此俳諧起原は。遠く足利時代にありたれども。一時の興に過ぎずして連歌と分離するまで勢力をば有せざりしが。當期の初に松永貞徳出でゝ大いに之を興し。寛永の頃には西山宗因出でゝ。談林風の旗を俳壇に翻し。松井宗且りの門下に起りて。伊丹派の俳諧風を唱へ。松尾芭蕉つひに元祿の天下を占めて。謂はゆる蕉風の門を開きたり。さて貞徳の句は如何。

木立には 過ぎたが花の 大椿

鈴虫の 聲にまじらぬ なまりかな

皆人の 蕨寐のたねや 秋の月

山や故郷 錦きてゆく 入日影
宗因のは如何。

富士は雪 三里裾野や 春の景

鴨の足は 流れもあへぬ 紅葉かな

頭巾寒うじて 北に峨々たる 青山なし

花むしろ 一見せばやと 存じ候

芭蕉のは如何。

扇にて 酒汲むかげや 散る櫻

雲雀より 上にやすらふ 峠かな

今宵たれ 吉野の月も 十三里

名月や 池をめぐりて 夜もすがら

うの風調の移り來れるさまを見るべし。

芭蕉の門下

芭蕉の門下には名匠多く。榎本其角。服部嵐雪。内藤丈草。森川許六。各務支考。向井去來。小川破笠。杉山杉風。などの徒いで、大いに其風を廣めし

かば。泰平の天下は。至るところとして俳諧の聲ならざるはなきに至りぬ。本居宣長曰はずや。

二つなき 翁なりけり。此道に

ねきなといへば 此ねきなにて

と。翁といへば既に芭蕉を代表するの固有名詞となる。知るべし天下に崇拜せらるゝの此に至れるを。

第六十四章 國學の勃興

季吟と契沖——解釋の書——假名遣の復古——研究の方針定まる

季吟と契沖

當期の歌人として聞わたるは。公家に鳥丸光廣あり。武家に細川幽齋あり。佛家に深草元政あり。隠士に下河邊長流あり。以て和歌の命脈を僅に繋ぎぬたりしが。北村季吟と僧契沖と出で。大いに此道のために貢献するところ少なからざりしかば。學問といへば漢學の事のみ思ひたりし天下の人々。我國に生まれて我國の事を知らずではあるまじき理りを日に月にさとらんとす。

頼もしき世とはなりにけるぞや。

解釋の書

遠く古へを考ふれば。保元平治の世の亂れよりこのかた。學びの小田は荒れはて。國史律令の書はいふまでもなく。和歌物語のたはやすきものとても。之を解釋し得る事容易ならぬ有様となりたるが上に。秘事口傳などいふ事さへ起りて。此道の進路を妨害すること一方ならざりき。今これらの書を探り集めて校訂し解釋し。世のため國の爲めに。丁寧深切到らざるなきは北村季吟なり。源氏物語には湖月抄を作り。枕草子には春曙抄を作り。八代集には抄を作り。以て後學の徒をして迷はざるに至らしめしは。いかにすぐれたる功績ならずや。又以て泰平の光といふべきがかし。

假名遣の復古

契沖の勞に至りては。更に感謝すべきものこりあれ。りの著はして上木せし書の數に於ては。季吟に優らずといへども。亂れに亂れたる假名遣の復古を唱へて和字正濫抄を著はし。語原を解き考證を試みて古書の讀法を一新したるは。其後學を導きし事いかにかりずや。此に於て國學は大いに其礎を固め。一方は語學の研究に向ひ。一方は古典の研究に向はんとす。また前日の歌書

研究の方針定まる

を弄するのみに止まらざりしなり。而して契沖が固めしところの礎。誰を待ちてか其柱を建て。梁を上げしめんとする。請ふ見よ。加茂眞淵は彼に招かれて來りしなり。本居宣長は彼に呼ばれて現はれしなり。菊は苔みぬ。土かひたる勞を思ひ出づる人こり少なければ。

第六十五章 著名の作者

細川幽齋

名は藤孝。伊賀守三淵晴貞入道宗薫の子にして。播磨守元常の養子なり。將軍足利義昭に仕へ。義昭亡びて後は織田信長に従ひて軍功も少からざりき。天正十年信長の弑せらるゝを聞きしかば深く之を悼み。剃髮して玄旨と號し。又幽齋と號す。幽齋もとより文才あり。殊に歌道に心を寄せしかば。わが據る宮津城の石田三成に攻められんとするや。之を捨てゝ田邊城に移りしが。こゝさへ兵火に罹らん事を慮り。ねのが秘藏の和歌相傳。二十一代集。源氏物語を悉く朝廷に奉り。和歌一首をうへたり。

いにしへも 今もかはらぬ 世の中に

心のたねを 残す言の葉

此城つひに敵に圍まるゝ事五十日。幽齋死を以て守ること益す固し。後陽成天皇これを聞しめし。幽齋死せば我國の歌道また滅びん事を憂ひ給ひ。爲めに勅使を賜ふ事二度に及びしかば。敵やうやく圍を解いて去りぬ。

のち關原の報を聞き。遁れて高野山に入りけるが。家康の天下となるに及び。うの和歌に勞あるをよみし。呼びかへして京都に住ましむ。京都の歌道。これによりて全く滅びざるを得たり。

慶長十五年八月卒す。年七十七。著はすところ。伊勢物語闕疑抄。百人一首抄。名所類似和歌。詠歌大概抄などあり。

烏丸光廣

父は光宣といふ。從一位准大臣たり。光廣權大納言となり正二位に進み。寛永十五年六十歳にて薨す。家集を黄葉和歌集といふ。外に著はすところ。耳底記。職人歌仙。春の曙などあり。當期公家中の歌人なりき。

風流磊落なりし人にて。常に十疊ばかりの居間に書き物を一杯ひろげ置き。机一脚硯石一つ。三本入の扇子箱に筆を入れたるが。室内に他人を入れざれば。物はすべて塵まみれなり。参内の時も會に臨む時も。此扇箱を車に入れて持ちあるけり。

或時關東へ下り留守なりし間に。かの書齋の前なる土藏を。雜掌ども邪魔なりとて取り毀ちしが。歸京の後何との一言もなかりければ。雜掌すゝみて。御庭の趣かはりは仕らずやと問ひしに。如何様ひろくなりたるやうなるが。藏はいかゞせしと言はれしとぞ。うの物に拘はらざりし。大かた此類。

松永貞徳

永種といひし人の子にて京都に生れ。幼名を勝熊といひ。壯年剃髮して松友と號し。後また髻を束ねて童服を着し。ことさらに童名を附けて。延陀丸また長頭丸と自稱せり。逍遙軒も其一號なりき。和歌をよくし連歌に熟し。遂に俳諧を起したり。

ある時京都三條通の大道にて徒然草を講せしに。都下の一豪家何がし。うの

雄辨に服して地面を贈り與へしといふ。

晩年盲目となりて侍童三人を傍に置きしが。甲を珍重。乙を満足。丙を祝着と呼べり。滑稽人たりし風彩想ふべし。

堯然親王より大佛殿の南に土地を賜はりしかば。みづから菓の木を植ゑて柿園と名づけたり。承應二年没す。年八十三。著はすところ。慰草。歌林雜話。徒然草長頭丸抄。頭林撲椒などあり。遺稿を逍遙集といふ。

深草元政

京都の人なり。二歳の時東山の大字火を見て家に歸り。直に眞似して書きたるが。立派に大の字を成せり。六歳にして初めて讀書を授けしに。毎句讀記して永く忘れざりしといふ。

八歳の時近江の彦根にゆき武藝を習ひ。十三の年より城主伊井侯に仕へ。名を石井俊平といへりしが。後僧となり山城の深草瑞光寺に住し。元政法師と呼ばれたり。

博學強記にして。誦經の暇には歌文を作るを樂しみとす。人來りて道を問へ

ば。必ず懇に之を示し。權勢を以て招く時は。貴人公子の家にも決して行くことなし。又贈るに絹帛を以てするものあれば。いつも木綿にかへて弟子に與へしとぞ。

生れながらにして孝心ふかく。父母を寺の近くに住ませて孝養いたらざるなし。父八十七歳にして没せしが。母かねてより甲斐の身延に詣でんとする志あり。元政これを扶けて同行せしは。母七十九の時なりき。此時身延記行の作あり。

寛文八年没す。年四十六。著はすところ數多きが中に。その文學に關係あるものは。釋氏二十四考。扶桑隱逸傳。身延山七面記。温泉遊草。草山集。草山和歌集。元々唱和集などあり。

かつて其草庵の壁に一編の戯文を張り附けて曰く。

不幸にして世を背ける墨の衣にはあらず。髪を結ばせるむつかしさにあたまを剃り。茅の軒端竹の柱に身を輕う爰にとめねき。樂しむ心から浮世を見るに。東西に走り南北に行く人。多くは身を思ふ事業にのみ足を

空になして。吉野の花のあはれをも知らず。深草の鶉の聲を聞いても。焼いてしてやりたいとばかり思ひ。後に何になる事ぞや。かく静ならぬ事は人間のみにあらず。山を出づる雲は雨を催さんとして岫を出で。深山の鹿は妻戀ふ世話に聲の限を鳴き明かす。これを思ふに此身ほど隙に樂な事なし。

惠心の作の佛一體もてども。後世を願ふためにもあらず。持ち傳へたる道具なれば御宿申すまでなり。極樂へ行き樂しみたいといふ慾がなければ。地獄へ落つる恐れもなし。死ぬるまで生きて居ようとあもへば。年のよるもへちまとも思はず。離のこぼれ種朝顔も。ゆがまうがすぢろうがあんなものと思ひ。時雨ふる夜の小夜嵐。吹かうと吹くまいと我身ひとりの苦にもならず。膝を容るゝ二枚敷一つにて事足り。雑糞くはぬ身には聞かせまいとはいはぬ鶯の聲も快く聞き。夜着もたぬ家にはさすまいともいはぬ依怙最負のない窓もる月をながめ。寐る筈の目なれば眠たければ晝もかきこもり。あるく筈の足なれば手の奴足の乗物こゝろ

の行くところへ迷ひありけど。盗みせぬ身なれば人も咎めず。覺けた事なれば忘れる事もなし。歳を數へた事なれば幾つやら知らず。あら樂や人目が人と思はねば。人をも人と思はざりけり。

深草の 元政坊は 死なれたり

我身ながらも あはれなりけり

一讀以て其人となりの酒々落々たりしを知るに足らん。

西山宗因

名を豊一といひ。通稱を次郎作といふ。梅翁。忘吾。向榮。皆その號なり。肥後八代の藩士なりしが。故ありて國を去り。剃髮して宗因と號し。大阪の天満に住む。

これより心を俳道に寄すること深く。遂に舊派を排して新調新體の句を作り出だし。こゝに談林風の一派を起しぬ。

天和二年江戸の旅中に歿す。年七十八。

門人に松井宗旦あり。別號を也雲軒といひ。生死年月は詳ならざれども。攝

津伊丹の人にして。無盡經。野梅集。鶉真似。遠山鳥。かやうに候者は。なごの書を著はし。伊丹風なる一派の俳風を起せり。

下河邊長流

大和の國宇陀の人にて通稱は彦六。初の名は具平といへり。幼なかりし時より學を好み。長じて國學に通じ和歌に妙なり。

中年より攝津に出でて住みけるが。遂に妻帯せずして。讀書のみを無上の樂しきとす。其記憶よかりしは。萬葉古今伊勢物語など。すべて諳誦しおたりといふ程なりき。

人となり氣胸高くして。他に束縛せらるるを好まず。心にかなはぬ事あれば來訪者にも面會せず。また富家の招にも應ずる事なし。唯枕を高うして打ち眠るのみ。

時に水戸の光國卿。長流の人となりを聞き。禮を厚うして召したれども遂に應ぜず。さらば萬葉の註釋を物してよと請はる。長流これを諾しながらも。意の向ふ時ならでは筆を執らざりしかば。成功を見ずして没せり。時に貞享

三年。六十三歳の六月なりき。著はすところ。續歌林良材。萬葉集名寄。林葉累塵集。百人一首三奥抄。歌仙抄。枕詞燭明抄などあり。家集を晩花和歌集とす。

井原西鶴

松壽軒又萬翁と號す。大阪の人にして俳諧を西山宗因に學び。大いに名あり。ある時住吉の社頭にて二萬三千句を吟せしより。人呼んで二萬翁と稱す。

なほ是よりも才名を天下に知られしは小説家としての西鶴にあり。その筆に成れる好色一代男。二代男。當世小夜嵐の如き。特に元祿文學の代表者として。知己を千載に失はざらんとす。

元祿六年八月十日没す。年五十二。

淺井了意

或は僧なりしともいふ。京都の黒谷に住みて。松雲。如鑑子。飄水子などの號あり。

元祿六年没す。年詳ならず。頗る通俗文をよくし。著はすところ。賞華吟。